

坐つて茶を飲んだ。

ヴェソフシチコフは大きな馬鈴薯を撮み、パン片にうんと鹽をつけて、静かに、ゆつくりと、牛のやうに噛み始めた。

——仕事はどうですか？——彼は口に頬張つたまま聞いた。

アンドレイが愉快氣に工場内の宣傳の發展について語つて聞かせると、彼は再び陰鬱なつきをして、低い聲で言つた。

——長過ぎる、長過ぎる！もつと早くしなければ……

母は彼を見た。彼女の胸にはひそかにこの人間に對する敵意が動くのであつた。

——人生は馬ぢやないから、鞭で打つわけにはいかん！——アンドレイが言つた。

ヴェソフシチコフは頑固に頭を振つた。

——長過ぎる！辛抱しきれん！俺は何をしたらよいのだらう！

彼は小ロシア人の顔を見ながら、絶望的に腕を擡げた。そして答を待ちながら黙つてゐた。

——我々は皆勉強して他人を教へねばならん、これが我々の仕事だ！——アンドレイは頭を垂れて言つた。

ヴェソフシチコフは尋ねた。

——ちや何時やるんだ？

——時が来るまでには我々は一度ならず毆られる、これは知つてゐる！——薄笑ひながら小ロシア人が答へた。——が何時我々が勝利を得るか——知らない！さう、先づ頭を武装せねばならん、それから手だ、私は思ふが……

ニコライは再び食ひ始めた。母は頷越しにそつと彼の廣い顔を眺めながら、そのうちに、ヴェソフシチコフのどつしりした、四角い姿を和げるやうなものを探さうと努力した。

そして小さい眼の刺すやうな視線に會つては、おづおづと眉を動かさせた。アンドレイはそれはそれはしてゐた、——不意に話し出して笑つたかと思ふと、ぶつくり話を切つて、口笛を吹いた。

母は彼の當惑が理解出来るやうに思つた。ニコライは黙つて坐つてゐて、小ロシア人が何かを尋ねても、短く、さも氣乗りしないやうに答へた。

小さい部屋の中で、その二人の住居人は、狭く、息苦しく感じて來た。彼等は交り番こに客の方をちらちら見るのであつた。

遂に彼は席を立ちながら言つた。

——俺は寝よう。——長い間監獄にゐて、——不意に出されて、やつと來たので。——疲れた。

彼が臺所に去つて、暫くごとと物音をさせた後、不意に死んだやうになつた時、母は静寂に耳を

傾けながら、アンドレイに囁いた。

あの人は恐ろしことを考へてゐる……

——氣の重い青年です！——頭を揺りながら小ロシア人は同意した。——然しこれは通り過ぎるでせう！ 私もある時がありました。心の中が明るく燃えない時——その中に煤が澤山たまります。

さあ、おばさん、お寝みなさい。私はもう暫く起きて、本を読みます。

母は更紗のベット・カーテンに覆はれた寢臺の据ゑてある一隅に退いた。アンドレイは卓子の傍に腰掛けながら、長い間彼女の祈禱や溜息の穏やかな物音を聞いてゐた。すばやく書物の頁を繰りながら、彼は焦々するやうに額を拭き、長い指で口髭をひねり、足をさらさら動かさせた。時計の振子が鳴った。窓の外では風が溜息をついた。

母の小さな聲が聞えて來た。

——お、神様！ この世に住む限りの人間は、皆自分自分に呻いてゐます。楽しんでゐるものが何處にゐませうか？

——そんな人間がもはやゐるんです！ 間もなく——澤山になるでせう、——えつ、澤山に！——小ロシア人が應じた。

二十一

生活は迅速に流れて行つた。多種多様な日々であつた。毎日何かかんか新しいことをもたらした。母はもはやそれに狼狽しなかつた。毎晩毎晩益々頻繁に見知らぬ人がやつて來た。忙しそうに、小聲で、アンドレイと語つては、夜遅く、襟を立て、帽子を眼深かに冠つて、用心深く、足音も立てずに闇の中へと消えて行つた。各人のうちに抑制された興奮が感じられた。皆歌つたり、笑つたりしたいやうに見えた。然しそんな事どころでなかつた。彼等はいつても急いでゐた。或者は嘲笑的で眞面目であつた。他の者は快活で青春の力に輝いてゐた。第三の者は靜かな考へ深い人たちであつた。——彼等總ては母の眼に何か同じやうな頑固な、確信的な點を持つて見えた。そしてめいめい違つた顔をしてゐたが——彼女には總ての顔が一つに融けあつた。暗い眼の深い眼差を持つた、丁度エムウスへの途上に於けるキリストの眼差のやうに、優しく、嚴格な眼差を持つた、瘡せて、沈勇のある、明かな顔に。

母はその人達を、わざとパーヴェルの周圍に群と集めて、考へるのであつた——この群の中で彼は敵から隠されるのであつた。

或時町から大膽なちぢれ毛の娘が来た。彼女はアンドレイに何かの包を持って来た。歸る時に、快活な眼を輝かせながらヴラソワに言つた。

——さよなら、同志！

——さよなら！——微笑をこらへて母は答へた。

娘を送り出すと、母は窓際に近寄つて、彼女の同志、春の花のやうに生々しく、胡蝶のやうに輕快な娘が、小さい足をちよこちよこ動かしながら通りを歩いて行くのを、笑ひなが眺めてゐた。

同志！——女客の姿が見えなくなると母は言つた。——可愛い、娘さん！ 神様がお前さんに生涯誠のある同志を與へて下さるやうに！

彼女は町から来る總ての人々に屢々何か子供らしい點を認めた。そして寛大に笑ふのであつた。然し彼等の信念は彼女を感動させ、又喜ばしく驚かした。彼女は益々明かに彼等の信念の深さを感じ、正義の勝利に關する彼等の夢が彼女を慰め、温めるのであつた。——彼等の話を聞きながら、彼女は思はず未知の悲哀に歎息した。然し就中彼女を感動させたのは、彼等の卒直と自分自身に對する床しい應揚なかまはなさであつた。

彼女は既に彼等が生活に就て語つたことのうちから多くを理解し、彼等が萬人の不幸の正しい原因を發見したことを感じ、又彼等の思想に賛成することに慣れて来た。然し魂の奥底では、彼等が自己流に生活を建て直ほし得ると言ふことと、總ての勞働大衆を自分の火に引き寄せせるに充分な力を彼等が持つてゐると言ふことは、信じてゐなかつた。各人は今日滿腹することを欲してゐる。若し自分の御馳走を只今食ひ得るとすれば、誰一人として明日の爲にさへそれを取つて置くことを欲しない。僅かの者しかこの遠い困難な道を行くものはないであらうし、僅かの眼しかその道の果に萬人同胞の物語的王国を見得ないであらう。このこと故に、彼等總ては、この善良な人達は、彼等の顎髯にもかかはらず、時々その疲れた顔が彼女に子供ちみて見えるのであつた。

——可愛い、お前さん達！——頭を振りながら彼女は思つた。

然し彼等總ては既に現在、善き、眞面目な、賢い生活を送り、善きことを語り、知つたことを人々に教へようと欲して、自分の身をいはずにそれをしてゐるのであつた。彼女はそんな生活をその危険さにも拘らず愛しうることを悟つた。そして溜息をつきながら後を振り返つて見ると、そこには彼女の過去が暗い、狭い帯となつて、平坦に伸びてゐるのであつた。彼女の胸には知らず知らずのうち、自分はこの新生活の爲に必要な人だと言ふ落着いた意識が形造られて行つた——以前彼女は決して自分を誰かに必要な者と感じなかつた。が今は明らかに多くの者に必要なことを知つた。是は新しい、愉快なことであつた。是は彼女の頭をもたげさせた……

彼女は工場にピラを持ちこむことを勵行した。彼女はそれを自分の義務として眺めてゐた。それで

刑事にとつて馴染みの女となり、彼等の眼にいつもちらちらした。五六度彼女は調べられた。然し何時も——工場にピラの現はれた翌日であつた。彼女は自分の用のない時に、刑事や番人の疑をおこさせるすべを心得てゐた。彼等は彼女を捕へて、探りまはつた。彼女は憤つたやうな振りをしながら、彼等と言ひ争つた。そして顔を赤らめながらも、自分の巧妙さを誇つて立ち去るのであつた。彼女はこの遊戯が好きになつた。

ヴェソフシチコフは工場に備つて貰へなかつた。彼は森林商人の働人になつて、場末町を丸太や角材や薪をひいて通つた。母は殆ど毎日彼を見た。緊張の爲に顫へる四肢を激しく地に突張りながら、一對の黒馬が行くのであつた。彼等は兩方とも老いぼれて、骨張つてゐた。彼等の頭は疲れて、悲しげに揺れ、どんより曇つた眼は苦しげに瞬きした。彼等の後から震動しながら長い濕つた丸太が續くか、或は音高く端をはねながら板の束が續いた。そしてその横には、手綱を垂れて、ニコライが歩いて行つた。汚れた襪を纏ひ、重い長靴を履き、帽子を阿彌陀に被つてゐた。土地から掘り出した根株のやうに無細工であつた。彼も又自分の足もとを見ながら頭を揺つてゐる。彼の馬は盲滅法に向ふから来る荷車や人に突き當る。彼の周囲には腹立たしげな罵聲が蜂のやうにからみつき、激昂した叫びが空気を切る。彼は頭も上げず、彼等に返答もしないで、鋭い、耳をつんざくやうな口笛を吹く。そして低い聲でぶつぶつ馬に呟く。

——おい、しつかりしろ！……

アンドレイのもとに同志が集つて外國の新聞やパンフレットの新版を読むやうな時には、ニコライも来て一隅に坐り、黙つて一時間でも二時間でも聞いてゐた。朗讀が終ると青年達は長い間議論した然しヴェソフシチコフは議論の仲間入をしなかつた。彼は皆から離れ、アンドレイと二人だけになつて、彼に陰氣な質問を浴びせた。

——誰が一番悪いんだい？

——最初に——これは俺のものだ！——と言つた奴が一番悪いことになるなあ。然しこの人間は何千年も前に死んでゐるので、其奴に腹を立てる譯にもいかん！——冗談半分に小ロシヤ人は言つた。

然し彼の眼は不安げに眺めてゐた。

——それぢや——金持は？ 其奴の味方をする奴は？

小ロシヤ人は頭をかゝへ、口髭を引張つた。そして長い間單純な言葉で生活や人間のことを話した然し彼の話を聞いてゐると、いつも人間全體が悪いやうであつた。ニコライはこれに満足しなかつた厚い唇を堅く結んで、彼は否定的に頭を振つた。そしてそうぢやないとあやふやに言ひ切りながら、不満に、陰氣に、歸つて行つた。

或る時彼が言つた。

——いや、悪い奴がきつとゐる筈だ、——奴等はゐる！ 俺はお前さんに言ふが——我々は全生活を汚い野原のやうに鋤き直ほさねばならんて、——容赦なしに！

——さうさう、それと同じやうなことを言つて、何時か圖案係のイサイがお前さん達のことを話してゐたつけ！——母が思ひ出して言つた。

——イサイ？——暫く黙つてから、ヴェソフシチコフが尋ねた。

——ええ、悪い人間だよ！ 皆のあとを嗅ぎまはつたり、ほちくつたり、——近頃はこの通りをうろついて、うちの窓を覗いたりする……

——覗く？——ニコライが繰り返した。

母は既に床に就いてゐたので、彼の顔を見なかつた。然し彼女は何か餘計なことを言つたと悟つたといふのは小ロシヤ人が慌て、取り持つやうに言ひ出したから。

——勝手にうろついて、覗かせて置けばよいんだ！ 暇な時には——あの男だつて散歩ぐらいするよ……

——いや、待て！——低い聲でニコライが言つた。——彼奴が悪いんだ！

——どうして？——すぐに小ロシヤ人は尋ねた。——馬鹿だと言ふのか！

ヴェソフシチコフはそれに答へないで、歸つて行つた。

小ロシヤ人は、静かに、細い蜘蛛のやうな足でさらさら音だてながら、ゆつくりと疲れぬやうに部屋を歩きまはつた。彼は長靴を脱いでゐた。——音を立て、ヴラソワの邪魔をしないやうに彼はいつもかうした。然し彼女は眠れなかつた。ニコライが歸つた時、心配そうに言つた。

——私はあの人が怖い！

——さう！——ゆつくりと小ロシヤ人は語尾を引張つた。——怒りつばい子供だ、おばさん、貴方はイサイのことをあれに言ひなさんな、——あのイサイは實際間諜だ。

——その筈ですよ。あれの教父は憲兵ですもの！——母は説明した。

——ひよつとするとニコライは彼をやつつけるかも知れん！——氣懸りらしく小ロシヤ人は言ひ續けた。——我々の生活の長官殿が身分の低いものにどんな感情を養成したか見て御覽なさい。ニコライのやうな男は自分の屈辱を感じると、勘忍袋の緒をきるのです、——これがしまひにどうなるでせう？ 空には血が飛び散り、地はその中で石鹼のやうに泡立つのです……

——怖いこと、アンドリユーシヤ！——小聲で母は叫んだ。

——蠅を吞まなきや、吐き出しもしないでせう！——暫く黙つてゐたがやがてアンドレイは言つた

——そしてやはり彼等の血の一滴一滴は豫め民衆の涙の湖で洗ひ清められてゐるのです……

彼は不意に静かに笑ひ出した。そして附け加へた。

——正當なことだが、然し——慰められない！

二十二

或る祭日の日に母は店から歸つて来て、扉を開け、敷居の上に立つた。と不意に全身が、温い夏の雨にあつたやうに、喜びを浴びた。——部屋にはパーヴェルの力のこもつた聲が響いてゐたのであつた。

——彼女だ！——小ロシア人が叫んだ。

母はすばやくパーヴェルが振りむいたのを見た。そして彼の顔が彼女にとつて何か大きなものを約束する感情に燃え上つたのを見た。

——とうとう歸つて来たね……家に！——彼女は不意を食らつて茫然としながら呟いた。それから腰を掛けた。

彼は青ざめて彼女の方へ身を屈めた。彼の眼尻には小粒な涙がきらきらと輝き、唇は顫へた。暫くの間彼は黙つてゐた。母も亦黙つて彼を見つめた。

小ロシア人は靜かに口笛を吹きながら、彼等の傍をうつむいて通り抜け、庭に出て行つた。

——有難う、母さん！——深い低い聲でパーヴェルは言つた。彼女の手を顫へる指で締めつけながら。——ありがたう。

息子の顔の表情と聲の響きに喜ばしく揺り動かされた彼女は、彼の頭を撫でた。そして心臓の鼓動を抑へながら、かすかに言つた。

——まあよかつた！——がなぜ？……

——なぜつて、我々の大事を手傳つて下さつたから——有りがたう！——彼は言つた。——自分の母親を精神的にも親身と言へるのは——これは類の少い幸福です！

彼女は無言で彼の言葉を明け放した心に貪るやうに呑みこみながら、息子を愛撫するのであつた。彼は彼女の前にそんなに朗かに近かしく立つてゐた。

——母さん、私は多くのことが貴方の心を苦しめてゐたのを知つてゐました。母さんはつらかつたでせう。母さんが我々と一緒になつて、我々の思想を自分のものとして受け入れて呉れることはよもやあるまい、——ただ一生辛抱して来たやうに、黙つて辛抱して呉れるだけであらう——私はかう思つてゐました。それはつらいことでした！

——アンドリユーシヤが非常に澤山に教へて呉れたのでね！——彼女は言葉を挟んだ。

——彼は私に母さんのことを話して呉れましたよ！——笑ひながらパーヴェルが言つた。

——エゴールさんもだよ。あの人と母さんとは同じ村なんだ。アンドリュージュは読み書きまで教へたがつてね……

——母さんは——氣まりが悪がつて、自分でこつそり勉強を始めたと言ふんでせう。

——あの人はもう知つてゐるの！——當惑して彼女は叫んだ。そして彼女の胸を滿した喜びの過剰に居たたまれなくなつたので、彼に言ひ出した。

——あの人を呼ばうぢやないの！ 邪魔になると思つてわざと出て行つたんだよ。あの人には——母親がないので……

——アンドレイ！……土間に通る扉を開けながらパーヴェルは叫んだ。——何處ですか？

——此處だ。薪を割らうと思つて。

——此方へ來なさい！

彼は愚圖愚圖しながらやつて來た。そして臺所へはいると世帯臭く言ひ出した。

——ニコライに薪を持つて來て呉れと言はねばならん、——うちの薪が残り少なくなつた。おぼさん、御覽なさい、パーヴェルがどんなになつたか？ お上は刑罰の代りに、謀叛人を肥らせるだけでせう……

母は笑ひ出した。彼女の心臓はまだ快く痺れてゐた。彼女は喜びに酔ひしれてゐた。然し既に吝嗇

な、用心深い何かが、彼女のうちに、いつものやうに落着いた息子を見たいといふ欲望を呼び醒した。彼女の心は餘りにも樂しかつたので、彼女は、生れて始めての——大きな——喜びを、それが訪れた瞬間の生々しさと強さのまゝ、心の中に一度にそして永久に包んで置きたいと思つたのであつた。それで幸福を減退させることを忘れて、あたかも偶然珍鳥を捕へた鳥指しのやうに、彼女は出来るだけ早くその幸福を伏せようと慌てこんだ。

——御飯にしませう！ パーシヤ、お前はまだだらうね？——いそいそと母が言ひ出した。

——えい。私は昨日看守から放免されることに定つたと聞いたので、今日は——飲みも食ひも出来なかつた……

——私が此處へ來て始めて會つたのは、シーゾフ老人でした。——パーヴェルが物語つた。——彼は私の姿を見つけると、道を横ぎつて來て挨拶するので。私は彼に言ひました——私は危険人物で、警察の監視づきの人間だから、これから用心して付き合いはんといけませんよと。彼は平氣だと言ひます。そして甥のことをどんな風に尋ねたと思ひますか？ フォールドはよい覺悟であるかと言ふのです。牢獄でよい覺悟と言へば——どんなのかと聞くと、言ふには、餘計なことを喋つて同志の不利益になるやうことはなかつたかと聞くのです。で私はフォールドは立派な人間で、惻巧だと言つたら、彼は頸掻を撫でて、傲然とかう言ひました——我々シーゾフ一家には、やくざな人間がゐない筈だ！

——彼は頭のある老人だ！——頷きながら小ロシア人が言った。——我々はもつと彼と話しあふやうにしようやないか。——善いお百姓だ。フエーヂヤも間もなく放免されるだらうね！

——皆放免されるだらうと思ふ！ 奴等の手にはイサイの證言の他に何も無いのだから。それにあの男は何を言ふこと出来よう？

母は前へ行つたり、後へ退つたりしながら、息子を眺めてゐた。アンドレイは彼の話を聞きながら手を後に組んで、窓の傍に立つてゐた。パーヴェルは部屋の中を歩きまはつた。彼の顎鬚は伸びてゐた。細い、黒い毛の小さな環が、薄黒い顔の色を和げながら、ぎつしりとからんでゐた。

——坐つて下さい！——母はスープを食卓に置きながら、申し出た。

食事の間にはアンドレイはルイピンのことを物語つた。彼が話し終つた時、パーヴェルは残念がつて叫んだ。

——私が家にゐたら——彼を手放すんぢやなかつたのに！ 彼は何か提げて行つたのか？ 大きな反抗心と四離滅裂の頭だ。

——ふん、——苦笑しながら小ロシア人が言つた。——人間が四十にもなれば、結構長い間自分の心中にゐる熊と戦つて來たのだ——彼を作り變へるのは難しからうて……

人々が母のわからない言葉で話し始める時に始まる議論の一つが出来上つた。食事が終つても、猶ほ引き續いて、激しく、難しい言葉の霰然たる霰を降り撒きあつた。時にはよくわかるやうに話すこともあつた。

——我々は一步も退かないで、我々の道を歩まねばならん！——斷然パーヴェルは言ひ切つた。

——そして途中で我々を敵と迎へる數千萬の人間と衝突しなければならん……

母は議論を聞きながら、パーヴェルは農民を好まないが、小ロシア人は百姓にも善を教へる必要があると立證しながら、農民をかばつてゐるんだと言ふことを理解した。彼女はアンドレイの言ふことの方がよくわかつたし、それに彼の方が正しいやうに思はれた。然し彼がパーヴェルに何かを話す都度に、彼女は心を引き締め、息子を凝めて、早く——小ロシア人が彼を怒らせはしないか？——知りたいと息子の答を待つた。然し彼等は互に腹を立てないで叫びあつてゐた。

時々母は息子に聞いた。

——パーシャ、さうかね？

彼は微笑みながら答へた。

——さうです。

——貴方がた、且那衆は、——愛嬌のある悪意をもつて小ロシア人が言つた、——たらふく召上るが、噛み方が悪いので、喉につかへてゐるんです。含嗽をして御覽なさい！

——ふざけるなよ！——パーヴェルが忠告した。

——私はまた——鎮魂祭に出てゐるやうな気がする！……

母は笑ひながら、頭を振つた……

二十三

春が近かづいた。雪が融けて、その底に埋れてゐた泥や煤が露はれて來た。泥は日増し日増しに頑強に眼について來た。場末町は何處も彼處も洗濯しない襤褸片を着たやうになつた。晝間は屋根から雪融け水が滴り落ちた。家の灰色の壁はぐつたりと汗ばんで煙つてゐた。夜になると至るところにぼんやりと氷柱が光つた。空には太陽が次第に頻繁にあらはれるやうになつた。そして小川は沼へと走りながら、決定的にせまらぎ始めた。

五月一日を祝ふ準備がされてゐた。

工場にも、場末町にも、この祭日の意義を説明したピラが飛んだ。宣傳にあづからない青年さへ、それを讀みながら言つた。

——こりや是非やらにやならん！

ヴェツフシチコフは陰氣な薄笑ひを浮べながら叫んだ。

——時が來た！ 隠れん坊をしよう！

フェーチャ・マージンは喜んだ。彼はひどく瘠せ細つて、その痙攣的な動作や會話が籠の中の雲雀に似て來た。いつも彼と一緒にゐるのは、口數の少い年に似合はず生眞面目な、今は町で働いてゐるヤコフ・サモフと、監獄生活で益々赤毛になつたサモイロフとであつた。ワシリイ・グセフ、ブーキン、ジラグーノフ、及び他四五名の連中は、武器を携行する必要を主張した。然しパーヴェル、小ロシヤ人、サモフ其他が彼等と議論した。

いつも疲れて、汗ばんで、せいせい息を切らせてゐるエゴールが來て、戲談口をきいた。

——現在機構變更の事業は——偉大な事業です、同志諸君。然しそれが好都合に行く爲には、私は新しい長靴を買はねばならん！——彼は破れて濡れた靴を指しながら言つた。——オーパー・シニューズも私のは修繕のきかんほど破けてゐるので、毎日私は足をすぶ濡れにしてゐます。我々が公然と古い世界を否定するまでは、私も大地の胸に移住したくないから、それ故私は同志サモイロフの武裝的示威運動に關する提議を却けて、私を丈夫な長靴で武裝することを提案します。蓋しこの方が社會主義の勝利の爲には、非常に大きな鼻面打ちさへよりも、有益だと深く確信するからであります！……こんな變てこな言葉で、彼は諸外國の民衆が如何にして自己の生活を輕減しようと試みたかの歴史

やな會話を聞き取つた。

——貴方が旗を持つのですか？——小聲で娘はきいた。

——僕です。

——もうきまつて？

——え、これは僕の権利です。

——また監獄ですね？

——パーヴェル黙つてゐた。

——貴方が出来ないといひのようですが、——彼女は言ひ始めたが、止めた。

——どうして？——パーヴェルが訊ねた。

——他の人に代つて貰へば……

——いけない！——聲高く彼は言つた。

——考へて御覽なさい、——貴方は非常に勢力があるし、皆貴方を愛してゐます！……貴方とサホ

ートカは——この地の第一人者です、——貴方がたが自由の身ならどれだけのことが出来るか、——

考へて御覽なさい！ それにこの爲に貴方はやられるじやありませんか、——遠い所へ、長い間！

母は娘の聲音に馴染深い感情が——思慕と恐怖が響いてゐるやうに思つた。サーシヤの言葉は、彼

女の心の上に、氷水の大粒な滴のやうに落ちて來た。

——いゝえ、僕はきめました！——パーヴェルは言つた。——どんなことがあつても、これだけは

止めません。

——私がお頼みしても？……

パーヴェルは突然早口に、何だか殊更嚴格な調子で語り始めた。

——そんなことを言つてはなりません、——貴方は何ですか！ なりません！

——私は人間です！——微かに彼女は言つた。

——よい人間だ！——これも亦小聲に、何だか息切れでもしたやうな特別な調子で、パーヴェルは

語り始めた。——僕にとつては貴重な人間だ——それ——だからこそ……それだからこそそんなこと

を言つてはなりません……

——さよなら！——娘は言つた。

彼女の踵の音によつて、母は彼女が足早やに、殆ど走るばかりに去つて行つたのを悟つた。パーヴ

エルは彼女に續いて庭に出た。

重苦しい、壓しつけるやうな恐怖が母の胸を抱きすくめた。彼女は何を語つてゐたのか理解しな

つた。然し彼女の前途に悲哀が待つてゐることを感じた。

——あれは何をしようとしてるんだらう？

パーヴェルはアンドレイと一緒に歸つて來た。小ロシヤ人は頭を振りながら言つた。

——えつ、イサイの奴め、——彼奴をどうしたらよいだらうな？

——悪處を止めろと忠告しなきやならん！——顔をしかめてパーヴェルは言つた。

——パーシヤ、お前は何をするつもりなのかい？——母は俯いて尋ねた。

——何時？ 今ですか？

——一日に……五月一日に？

——あゝ！——聲を低めてパーヴェルは叫んだ。——私は旗をもつて、——先頭に立つのです。この爲に私は又監獄に行くことになりませう。

母の眼は熱くなつた。口は氣持悪く乾燥した。彼は彼女の手を取つて撫でた。

——これは必要なんです、わかつて下さい！

私は何も言はないよ！——彼女はゆつくりと面をもたげながら言つた。そして彼女の眼が彼の眼の頑固な輝きと出會つた時、再び首を垂れた。

彼は彼女の手を放して、歎息した。それから咎めるやうに言ひ始めた。

——母さんは悲しまないで、喜んで呉れるやうにならなさいませぬ。——何時になつたら母親

が自分の子供を喜んで死地へ送るやうになるでせう？——

——いざ、いざ！——小ロシヤ人が呟いた。——わが君様にはカフタンの袖を捲くつてまつしぐら

！……
——私がお前の身をきづかふのは、——これは親心と言ふものだよ！……

私がお前の身をきづかふのは、——これは親心と言ふものだよ！……

彼は彼女の傍を離れた。それから彼女は激しい、鋭い言葉を耳にした。

——人間の生活に邪魔な愛がある……

彼女は身軀ひをして、彼がなほも彼女の心を突き除けるやうなことを言ふのを恐れ、早口に言つた。

——もう結構、パーシヤ！ 私はわかるよ、——他に仕方がないんだと、——同志の爲にね……

——いゝえ！——彼は言つた。——私は此を——自分の爲にやるんです。

戸口にアンドレイが突立つた——彼は敷居より高かつた。今枠の中にはいつたやうにその下に立ちながら、變に膝を曲げ、片方の肩で脇柱に寄りかかり、片方の肩と、頸と、頭とを前の方に突き出してゐた。

——よい加減にほざくのをお止めなさい！——彼はパーヴェルの顔に自分の飛び出た眼を不機嫌に注ぎながら言つた。彼は岩の合間の蜥蜴に似てゐた。

母は泣き出したくなつた。彼女は息子に涙を見せまいと思つて、不意に咳いた。

——あつ、——私は忘れてゐた……

そして土間に出た。其處で頭を隅つ子に突込んで、屈辱の涙に身をまかせた。そして無言で音も立てずに、その涙と共に彼女の心臓から血が流れ出るかのやうに、涙のために弱りながら泣いた。きつちりと閉めない扉越しに、漠然とした争論の響きが聞えて來た。

——君はどうしたと言ふのだ、——母親を苛めて喜んでゐるのか？——小ロシア人が尋ねた。

——君にはそんなことを言ふ権利がない！——パーヴェルは叫んだ。

——君の馬鹿げた山羊のやうな跳ねさまを見ながら、黙つてゐたら、僕はさぞ君のよい同志だらう

よ！ 君はなぜあんなことを言つたのだ？ えゝ？

——イエス、ノーはいつも断然と言ふ必要がある！

——それを母親にかい？

——誰にでもだ！ 足に食ひついて引きとめるやうな愛や友情なら欲しくない……

——えらい！ 鼻を拭け！ 拭いたら——サーシエンカのところへ行つて、今と同じ様に言つて見

ろ。あれは彼女に言はねばならんことだ……

——僕は言つた！……

——言つた？ 嘘をつけ！ あれにはもつと愛想よく言つたらう、優しく——言つたらう、僕は聞かなかつたが、それでも——わかつてゐる！ 母親の前でヒロイズムの大風呂敷を擴げるなんて——

おい、山羊さん、——君のヒロイズムは銚一文の値打ちもないぞ！

——ヴラソワは素早く頬の涙を拭き始めた。彼女は小ロシア人がパーヴェルを辱かしめるのを恐れて、急いで戸を開けた。そして台所へはいると、顫へながら、悲哀と恐怖に胸一杯になつて、聲高かに言ひ始めた。

——おおーお、——寒い！ これでも——春か……

當もなしに臺所で色々な物を置きかへながら、部屋の中の低い聲を掻き消そうと努めて、彼女は更に聲高かに言ひ續けた。

——すっかり變つてしまつた、——人間ののぼせ上がつて、天氣が寒くなる、今時分はもうとくに陽氣が始まつて、晴れた空やおてんとうさまが拜める時もあるのに……

——部屋の中が靜かになつた。彼女は待ち設けながら臺所の眞中に立ちどまつてゐた。

——わかつたかね？——小ロシア人の靜かな質問が聞えた。——これは理解しなければならん——

——畜生！ そうすれば、——君より豊かに……

——お茶を飲みませんか？——顫へる聲で彼女は尋ねた。そしてこの顫へを隠すために答を待たな

いで叫んだ。

——どうしたことだらう、私は冷えきつてしまった！

彼女の方へゆつくりとパーヴェルが出て来た。彼は顔越しに見た。彼の唇には悪るそうに顫へてる微笑が浮んでゐた。

——母さん、御免なさい！——大きくない聲で彼は言った。——私はまだ子供で、——馬鹿です……

——放つといってお呉れ！——彼の頭を自分の胸に抱き寄せながら！——悲しそうに、彼女は叫んだ——何も言はないで！——さう——お前の生活は——お前のことだから！——然し苛めないでお呉れ！

母親がどうして氣づかはないでゐられよう？——そんなことは出来ない。——私は誰のことも皆心配になる！——お前たちは皆——親身の人で、皆——大切な人だもの！——私でなくて誰がお前達のことを心配しよう？……お前が行くと——その後から——他の者が、總てを投げうつて、跟いて行つた……パーシャ！

彼女の胸には偉大な、熱い思想が波うち、心を憂はしく、惱ましい喜びの感動をもつて翼づけた。

然し母はどう言つてよいかわからなかつた。そこで自分の口のきけない苦さに、手をふりまはしながら、明かな、鋭い疼痛に燃える眼で息子の顔を眺めた。

——わかりました、母さん！——御免なさいね！——彼は頭を俯せながら呟いた。そして微笑をうか

べてちらつと彼女を見た。面はゆく感じながらも喜べる彼は横の方を向いて附け加へた。

——私のことを忘れません、——きつと！

彼女は彼を押しやつて、部屋の中を眺めながら、懇願的に愛想よくアンドレイに向つて言つた。

——アンドリユーシャ！——あれは怒鳴らないでやつて下さい！——貴方は勿論年上なのですからね。

彼女に脊をむけて立ちながら、體を動かさうともしないで、小ロシヤ人は變に、おかしげに吼え始めた。

——おゝ！——喚きつけてやります！——事によつたら毆つてやります！

彼は手を差し伸しながら、ゆつくりと彼の方に近寄つて行つて、言つた。

——ねえ、貴方……

小ロシヤ人は振りむいて、牡牛のやうに頭をかしげた。そして脊中で兩手を堅く握りしめて、彼女の襟を通つて臺所へ出て行つた。そこから不機嫌な嘲笑的な彼の聲が聞えて来た。

——パーヴェル、僕が君の頭を噛みちぎらないうちに出て行け！——これは戯談ですよ、おばさん、ほんとにはいけません！——私はサモワルの用意をしてゐるんです。さうですよ！——うちの炭と言つたら、濡れてやがつて、畜生！

彼は押し黙つた。母が臺所へ出て行つた時には、彼は床に坐つてサモワルを吹いてゐた。彼女を見

ないで、小ロシヤ人は再び始めた。

——びくびくしなくてもよろしい、——私は彼に觸りません！ 私は穩しいことと言つたら——蒸蕪膏そつくりです。その上私は……おい、大將、聞くなよ、——私は彼が大好きなんです！ 然し私は——彼のちよつきが氣に食はん！ 見て御覽、彼は新しいちよつきを着て、それがひどく氣に入つたので、あれまあ、腹を突き出して歩いてゐることと言つたら。誰でもかまはず押し除けてゐます——が私のちよつきを見て下さい！ それは上等でせう、——實際、然し——別に押し除ける理由もないぢやありませんか？ それでなくても狭いんですからね。

パーヴェルは苦笑して言つた。

——文句もよい加減にして呉れんか？ 一遍咬まれりや、——それで澤山だ！

床に坐りながら、小ロシヤ人は足をサモワルの兩側に投げ出して、それを眺めてゐた。母は戸口に立つて、アンドレイの圓い頂や長いかどめた頸に、愛想のよい、悲しげな視線を注いでゐた。彼は後に反りかへつて、兩手を床についた。母と息子を稍々赤らんだ眼で見つめて、瞬きをしながら、小聲で言つた。

——君達はいゝ人だね、——實際！

パーヴェルは身を屈めて彼の手を取つた。

——引つ張るなよ！ 低い聲で小ロシヤ人は言つた。——そうすりや僕は倒れてしまふ……

——なにを遠慮してるの？——悲しげに母は言つた。——接吻しあへばよいのに、——堅く、堅く

抱きあつて……

——いゝか？ パーヴェルは尋ねた。

——いゝとも！——小ロシヤ人は立ち上りながら答へた。

堅く抱きあつた、彼等は暫くは死んだやうであつた——二つの體、友情に燃えた一つの魂。

母の顔には既に輕やかになつた涙が流れ落ちた。それを拭ひながら、彼女はどきまぎして言つた。

——女は泣きたがりだね、——悲しいと言つては泣き、嬉しいと言つては泣き……

小ロシヤ人は物軟かな動作でパーヴェルを押し除けて、これも亦眼を指で拭ひながら、言ひ始めた。

——さあ！ 肉がふさけてやがる、焙らにやならん！ それに根齧生の炭奴！ 吹きまくてやつた

ら、——眼が痛くて……

パーヴェルは頭を垂れて窓に向つて腰をおろした。そして靜かに言つた。

——こんな涙は恥かしくない……

母は彼に近寄つて、その隣りに坐つた。彼女の心は氣強い感情をもつて、温かに、優しく、まとはれた。彼女は悲しかつたが、然し氣持よく且つ平靜であつた。

——私が食器を並べますから、——おばさん、あなたは坐つてゐなさい！——小ロシヤ人は部屋へと姿を消しながら言つた。——一服するんですね！ 心配させたから……

そして部屋で彼の歌ふ聲が聞えた。

——我々は今こそ生活を素晴らしいと思つた、——眞實の、人間的な、生活を……

——さうだ！——母を見ながら、パーヴェルは言つた。

——總ては變つた！——彼女は後を受けた。——悲哀も違へば、歡喜も——違ふ……

——さうなければならん！——小ロシヤ人が言つた。——といふ譯は新しい心が生ひ立つからですよ、私のおばさん、——新しい心が人生のうちに生ひ立つのです。人があつて、人生を理性の火で照らし、叫び、呼び掛ける——おい、萬國の同志よ、一家族に結合せよ！ すると彼の呼聲に應じて、萬人の心はその健康な自分の片端を銀の鐘のやうな力強い、響き高い、巨大な心につなぎ合はすのです……

母は顫はないやうにと堅く唇を結び、泣き出さないやうにと堅く眼を閉ぢた。

パーヴェルは手をあげて、何か言はうとした。然し母は彼の片一方の手をつかまへて、それを下に引張りながら囁いた。

——あの人の邪魔をしないで……

——知つてゐますか？——戸口に立ちながら、小ロシヤ人は言つた。——人々の將來には深山な悲みがあります、尙ほ多量の血が彼等から搾り出されることでせう。然し總て是は、總ての悲みも、私の血も——既に私の胸に、私の脳髓にあるところのものに較べたら、僅かな値段です……私は既に金持です、星が光を豊かに持つてゐると同じです、——私は總てを忍びます、總てに耐へます、——といふ譯は——私の心には誰も、何も、また決して何時だつて、殺し得ない喜びがあるからです！ この喜びの中に——力があるのです！

茶を飲み、夜半までも卓についてゐた。人生や、人々や、未來やに關する興味深い會話を交へながら。

そしてある思想が彼女に明白になつた時には、母は溜息とともに、自分の過去から、いつだつて重苦しく、豊卓な何かを取り出して來るのであつた。そして自分の心から出て來たこの石でその思想を確めてみた。

濇い會話の流れのうちに、彼女の恐怖は融け去つた。今や彼女は父に怒鳴られたあの日頃のやうな自分を感じた。

——眼れ面をする必要はねえ！ 馬鹿があつて、お前を嫁に欲しいとなりや——行け！ どんな娘でも嫁に行くし、どんな女でも子供を生むし、どんな親にも子供は——涙の種だ！ お前は何だ——

人間でねえのか。

この言葉の後で、彼女は自分の前途に、荒漠とした薄暗い場所のまはりに果もなく續いてゐる避け難い小徑を見たのであつた。そしてこの小徑を行かねばならん不可避性は、彼女の胸を盲目な安心で一杯にした。今も是と同じであつた。然し新しい悲哀の到来を感じながらも、彼女は内心で誰かに言つた。

——とりたければ、とるがよい！

これは、引き張つた絃のやうに、彼女の胸に顫へながら歌つてゐる、彼女の心の靜かな痛みを輕減した。

そして期待の悲しみに立ち騒いでゐる彼女の魂の奥底には、強くはないが、然し消えることなく、一つの希望が燦つてゐた。すつからかんに取られ奪はれることはまさかなからう！ 何かが残されるにちがひない……

二十四

朝早く、まだパーヴェルとアンドレイが家を出たばかりの時に、コルスーノワが騒々しく窓を叩いて、あはたゞしく叫んだ。

——イサイが殺された！ 見に行きませう……

母は身顫ひした。彼女の腦裏には火花のやうに殺人者の名が閃いた。

——誰が？——肩掛を肩に投げかけながら彼女は短く尋ねた。

——其奴はまさかイサイの上に乗つかつてやしないわ、やつつけて、逃げた！——マリヤは答へた。

通りで彼女は言つた。

——また大騒ぎをして探しまはるんでせう。お前さんとこの人たちは夜家にゐたのでよかつたわね

——私が證人よ。夜中過ぎに、お前さんとこの前を通つたので、窓を覗いたら、お前さん達は皆で卓子に座つてた……

——どうしたの、マリヤ？ あの人達に疑ひがかかつたりなんぞするの？——びつくりして母は叫んだ。

——誰があつた男を殺したとなりや、お前さんとこの人達より他に心當りがないものね！——確信ありげにコルスーノワが言つた。——だつてあつた男があつた人達を嗅ぎまはしてゐたのを皆知つてゐますからね……

母は息をきらして立ち止り、片手を胸に置いた。

——どうしたの？ そんなことを言つてよいの！ 泥棒や人殺しにかかずらふなんて！ 早く行きませう、取り片附るといけないから……

工場の壁から程近い、最近焼けた家の跡に、足で炭を踏みつけ、灰をかきあげながら、人だかりがして、蜂群のやうにがやがや騒いでゐた。大勢の女や、それ以上大勢の子供や、張店商人や、料理屋の給仕や、警官やがゐた。房々した銀色の顎鬚をのびし、胸に幾つもメダルを附けた脊高い老人、憲兵ブリトンもゐた。

イサイは焼け残つた木材に脊を凭せ、裸の頭を右肩に落して、土塊の上に半倒れになつてゐた。右手をズボンのポケットに突込み、左手の指でぼろぼろの土をつかんでゐた。

母は彼の顔を覗いて見た——イサイの片目は、ぐつたりと投げ出した兩足の間に轉がつてゐる帽子をぼんやりと眺めてゐた。口は喫驚したやうに半分開いてゐた。彼の赤茶けた短い顎鬚は横腹を突いてゐた。尖つた頭と雀斑のある骨ばつた顔とをもつた瘦せた體は、死に壓しつけられて猶更小さくなつてゐた。母は溜息をついて十字を切つた。生きてゐた時には、彼女に嫌はしい人間であつた。今は靜かな憐憫を呼び覺した。

——血がねえや！——誰かが嘔き聲で言ひ出した。拳固で殴つたと見える……
意地の悪い聲が聲高に言つた

——いゝ加減なことをぬかせ……

憲兵はちたばたして、兩手で女を掻き分けながら、威嚇的に訊ねた。

——今言つたのは誰だ、あん？

人々は憲兵に押されて散らばつた。或者はすばやく走りのいた。誰かがさま見ろと言はんばかしに笑ひ出した。

母は家へと歸つた。

——可哀想に思つてやる人は誰もなし！——彼女は思つた。

彼女の前には、影のやうに、ニコライの幅廣い姿が立ちはだかつた。彼の細い眼は冷く、慘酷に眺め、右手は怪我でもしたやうにぶらぶら揺れてゐた……

息子とアンドレイが食事に歸つて來た時、彼女は何よりも先づ彼等に聞いた。

——それで、何かね？ 誰もつかまらなかつたかい——イサイのことで？

——何とも聞かない！——小ロシヤ人が應じた。

彼女は彼等が二人とも壓倒されてゐるのを見た。

——ニコライのことを何とも言はないか？——小聲で母は訊ねた。

息子の險しい眼が彼女の顔に注がれた。それから聞きとれる程の聲で言つた。

——何とも言つておけません。恐らく考へてもおかないでせう。彼は此處におないので。昨日の晝に河へ行つたきり、まだ歸つておません。私は彼のことを聞いて見たのですが……

——まあ、やれ、やれ！ ほつとしたやうに溜息をついて母は言つた。——やれ、やれ！

小ロシヤ人は彼女を見て、それから頭を垂れた。

——あの人は倒れてゐた、——考へながら母は物語つた。——丁度喫驚したと言ふやうな顔をしてゐたつけ。そしてあの人を可哀想に思つたり、よく言つたりする者は一人もおかないのさ。小つちやくて見すばらしいんだもの。丁度氣絶だね、——何かにかんとやられて、ひつくりかへつたまま、倒れてゐるやうだよ……

食事の最中にペーヴェルは突然匙を投げて叫んだ。

——僕にはわからない！

——何が？——小ロシヤ人が訊ねた。

——食はねばならんと言ふだけで生物を殺すのは、——實際嫌だ。——野獸や猛獸を殺すと言ふのなら——それは分る！ 僕自身だつて人々にとつて野獸になるやうな人間なら、殺すことも出来るだらうさ。然しあんな貧弱な人間を殺すなんて——どうして手が振れたんだらうな？……

小ロシヤ人は肩をすぼめた。其の後で言つた。

——彼奴は野獸に劣らない害物だよ。蚊がちよつぱり我々の血を吸ふたつて——ひつぱたくちやないか！——小ロシヤ人は附け加へた。

——それは、さうだ！ 僕の言ふのは——そのことぢやない……嫌だ！——と僕は言ふんだ。

——どうするんだい？——アンドレイは再び肩をすぼめながら、應じた。

——君ならあんな奴を殺せると言ふのかい？——長い沈黙の後でペーヴェルは考へ深く訊ねた。

小ロシヤ人は圓い眼で彼を見、ちらと母の方に眼をやつて、それから悲しげに、然し斷然と言つた。

——同志の爲なら、仕事の爲なら——僕は何でも出来る！ 人殺しもする。たとへ息子であつても……

——まあ、アンドリユーシヤと言つたら！——母は小聲で叫んだ。

彼は彼女に微笑んで見せた。それから言つた。

——他に仕様が あるもんか！ さうした生活だもの……！

——さうだね！……ゆつくりと長く引きのばしてペーヴェルは言つた。——さうした生活だ……！

突然内心の衝動に打ち負けたやうに興奮して立ち上つたアンドレイは、手を振り廻はしながら言ひ始めた。

——君達はどうするのか？ 人間を專一に愛し得る時節の到來を促進するために、人間を憎まねばならなくなつてゐるのだ。生活の歩みを妨害したり、自分の安樂や利益を顧はうとて金の爲に人々を

賣つたりする連中を減す必要があるんだ。若し正しき者の道にユダが立つて、彼等を賣らうと待ち構へてゐるならば——僕は彼奴を生き残して置くよりも、自分がユダになる方がよい！ 僕にそうする権利がないだらうか？ 彼奴等は、我々の主人達は、——兵隊や死刑執行人や遊廓や牢獄や懲治監や其他彼等の平安や安樂を保護するあらゆるからくりを、保有する権利を持つてゐるぢやないか？ 時僕が彼等の棍棒を自分の手に取つたとしても、——どうしたと言ふんだ？——僕は取る、決して拒まない。彼奴等は我々を十人、百人とかためて殺す、——是は、僕に、手を上げて、それを敵の頭の一つに、誰よりも僕に接近して來た、そして僕の一生の仕事に誰よりも有害な敵に、打ちおろす權利を與へるのだ。さうした生活だ。僕はその生活に反抗して行くものだし、勿論それを好まない。僕は知つてゐる、——彼等の血を以てしては何物も創りえない、それは無益の殺生だ！……我々の血が臺雨となつて降り注ぐ時に眞理は良く生長するので、彼等の腐つた血は痕かたもなく消えてしまふのだ。僕はこのことをよく知つてゐる！ 然し僕は、必要！——とさへ認めたら、自分に罪を引きうけて殺してやる！ 僕は單に自分のことを言つてゐるんだ。僕の罪は僕とともに死滅して、未來の爲に汚點となつて残るやうなことはない。その罪は僕一人を減すだけで、——僕以外には——何人も汚さない！

彼は自分の面前で片手を振りまはしながら、部屋中を歩きまはつた。丁度空中で何かを知つて、自

分と切り離してゐるやうであつた。母は、彼の胸中に何かが碎けて、彼は苦しんでゐるのだと感じて悲哀と不安を以て彼を眺めてゐた。人殺しに關する暗い、危険な考は彼女から遠退いた——若しもヴエソフシニコフが殺さなかつたならば、パーヴェルの仲間では誰もそんなことをしうる者はゐない、——彼女は思つた。パーヴェルは頭を垂れて小ロシア人の語るのを聞いてゐた。が彼は執拗に、力強く語るのであつた。

——前への道では、自己に反しても進まねばならんことがある。總てのものを、心全部を投げ出せなくてはならない。生命を投げ出して、仕事の爲に死す——これは簡単なことだ！ 投げ出せ——大なる物を、君にとつて君の生命より貴重なるものを——投げ出せ、——その時には君の最も貴重なるものが力強く伸びるであらう、——君の眞理が！

蒼ざめた彼は部屋の眞中に立ちどまり、半眼を閉ぢた。そして嚴かに誓言しながら、手を上げて言つた。

僕は知つてゐる、——人々が互に愛しあふやうになり、各人が他人の前に星のやうになる時が來る！ 大地の上を自由な、自分の自由によつて偉大な人々が、歩きまはるやうになる。皆あけつばなしの心を持つて歩み、誰の心も猜みを忘れて清らかになり、皆惡意をもたなくなる。その時には生活が來るのではない、——人間への奉仕だ。人類の聖像は高くかゞげられ、自由人にとつては——總

ての高みが到達されてゐるんだ！ その時には人々は美の爲に眞理と自由のうちに生きる。そしてより深く心を以て世界を抱き、より深くそれを愛するものが最善と考へられるであらう、——最も自由な者が最も善き者になる——彼等のうちにこそ最大の美があるのだ！ この生活の人々は偉大になる……

彼は言葉を切つた。身を伸して胸一杯の音量を以つて言つた。

——それで——この生活の爲には——僕はどんなことでもやる……

彼の顔は顫へた。眼からは大粒の、重い涙が續けさまに流れ落ちた。

パーヴェルは頭を上げた。そして青さめ、廣く眼を見張つて彼を見た。母は陰鬱な不安が如何に彼女にむかつて伸び上り、迫つて来るかを感じながら、椅子から腰を浮かせた。

——どうしたんだ、アンドレイ？——靜かにパーヴェルは訊ねた。

小ロシヤ人は頭を振り、絃のやうに體を伸して、母を見ながら言つた。

——私は見ました……知つてゐます……

彼女は立ち上つて、素早く彼に近づき、彼の兩手を掴んだ——彼は右手を引き抜かうと試みた。然し彼女は堅くそれを握つてゐた。彼女は熱い囁きを以つて言つた。

——ねえ貴方、靜かに貴方……

——待つて下さい！——小ロシヤ人は低く口ごもつた。——私は貴方にそれがどんなであつたか話、してあげませう……

——いりません！——彼女は涙ぐんで彼を見ながら囁いた。——いりません、アンドリユーシヤ……

パーヴェルは同志を濕つた眼で見ながら、ゆつくりと近づいて來た。彼は眞蒼であつた。そして薄笑ひながら、大きくない聲で、ゆつくりと言つた。

——母は君が……でないかと恐れてゐるんだ……

——私は——恐れてやしません！ 信じません！ たとひ見たとしても——信じなかつたでせう！

——待つて下さい！——小ロシヤ人は彼等を見ないで、頭を振り、やはり手を抜かうとものがきながら、言つた。——私ではない、——然し私はさうさせないやうに出來たんだ……

——止せ、アンドレイ！——パーヴェルは言つた。

片方の手で彼の手を握りながら、パーヴェルは今一方の手を、脊高い體の顫へを止めようと欲するかやうに、小ロシヤ人の肩に置いた、小ロシヤ人は二人の方に頭を傾けて、小聲に、きれぎれに話し始めた。

——僕はしたくなかつた、君にはわかる筈だ、パーヴェル。こんな具合になつたんだ。君が一足先に歸へり、僕はシラグーノフと町角で立ち止つた時に——イサイが曲り角から出て來た、——距離を

おいて立ちどまつた。我々を見て、にやにや笑ふぢやないか……ジラグーノフは言つた——見ろ？
彼奴は夜通し俺のあとをつけてやがるんだ。俺はあいつをばらしてやる。そして見えなくなつた、——
——僕は思つた——歸つたと……するとイサイは僕の方に近よつて來た……

小ロシヤ人は息をついだ。

——僕は誰にだつて彼奴のやうに悪し様に辱められたことがない、犬奴。

母は黙つて、彼の手をつかまへて卓子の方へ引つ張つた。そしてやつとのことで彼を椅子に坐らせ
た彼女自身も彼と肩を並べて腰掛けた。パーヴェルは陰鬱に顎髯をつまみながら、彼等二人の前に立
つてゐた。

——彼奴が言ふには、我々は皆知られてゐる、我々は皆憲兵のブラツク・リストについてゐる。我
我は残らず五月にならんうちに捕へられるだとき。僕は返答しないで笑つてゐたが、心は煮え返るや
うだつた。彼奴はまた、僕は聰明な若者だから、そんな道を行つてはならん、それよりか……などめ
かしやがる……

彼は言葉を切つて、左手で顔を拭いた。彼の眼は乾いて光つた。

——僕にはわかる！——パーヴェルは言つた。

——かう言つたんだらう、それよりか法律になつた勤めをしるつて、えゝ？

小ロシヤ人は手を振りまはし、拳固を振つた。

——法律になつただつて、——根畜生！——彼はぶつぶつと齒の間で言つた。——いつそ頬でも
殴りやがればよいのに……僕にだつて樂だし、——彼奴にだつて、多方、そうだらう。然しかうして
彼奴が僕の心に臭い唾をはきかけた時に、僕は我慢がならなんだ。

アンドレイは痙攣的に自分の手をパーヴェルの手から引き抜いて、更に低い聲で、嫌厭を以て言つ
た。

——僕は彼奴の横面を殴つて——立ち去つた。と僕に聞えた——後からジラグーノフが小聲でかう
言つたのを——甘くいつたなあ？ 彼は曲り角に隠れて、きつと……

暫く黙つてから、小ロシヤ人は言つた。

——僕は振りむかなかつた、——殴る音を聞いた……と思つたが……僕は藁を蹴つたぐらいの事に
思つて平氣だつた。仕事に出ると、イサイが殺された！——と叫んでゐる。信じられなかつた。然し手
がうづいた、——うまく動かなかつた、——痛むのではないが、然し何だか短くなつたやうだつた……
彼は横目で手を眺めて言つた。

——一生かかつて、本當に、僕はこの汚れた汚點を洗ひ消せない……

——貴方の心さへ疾ましくなければそれでいゝぢやありませんか、——ねえ、さうでせう、——小

聲で母は言つた。

——私は自分に罪があると云ふのではありません、——ちがふ！——小ロシア人は斷然と言つた。

——然し私は嫌なんです！ 私にとつていらでものことなんです。

——僕にはよくわからん！ パーヴェルは肩をすぼめて言つた。——君が殺したのでなかつた、然し、かりに……

——人殺しを知りながら、とめなかつたと言ふのだ。

パーヴェルは斷然と言つた。

——僕にはまるでわからん。

そして暫く考へてから言ひ足した。

——わかるにはわかるが、然しそんな氣持には——なれん。

汽笛が鳴つた。小ロシア人は頭を横に傾けて、力強い唸りに聞き入つた。それから體を揺すつて言つた。

——仕事は止める……

——僕も止そう。パーヴェルは應じた。

——湯屋に行つて来る！——薄笑ひながら小ロシア人は言つた。そしてすばやく、黙々と用意をし

て陰氣な顔つきで出て行つた。

母は彼を同情のこもつた視線で見送つてから、息子に言つた。

——パーシヤどう思ふか知らないがね！ 私は——人を殺すことは罪だと知りながら、——誰も悪いと思へない。イサイが可哀想だ、あの男は釘のやうに小つぽけなんだから、私は彼奴を見て、彼奴がお前を締め殺してやると言つて嚇かしたのを思ひ出したよ、——それでも彼奴が死んだのをいゝさまだとも、嬉しいとも思はない。可哀想になつたのさ。然し今は——可哀想にも思はない……

——彼女は口をつぐんだ。暫く考へてから、驚いたやうに微笑みながら言つた。

——おやまあ、パーシヤ、私の言つたことを聞いたか？

パーヴェルは確かに聞かなかつたに相違ない。頭を垂れてゆつくりと部屋を歩きながら、彼は考へ深く、顔をしかめて言つた。

——これが生活なんだ！ 人々がどんな風に睨みあつてゐるか御覽なさい？ 欲しもしないのに、——ついでに——殴る！ 誰を？ あんな貧弱な人間を。彼奴は母さんよりまだ不幸ですよ、と言ふのは——馬鹿だから警官や憲兵や間諜は——皆我々の敵だ、——彼等は皆我々と同様な人間のくせに、同様に彼等の血をすゝる、同様に彼等を人と思はない。皆——同様にだ！ まあ人を向ひ合せに並べて、無智や恐怖で盲にし、皆の手足をくくつて、押しつけたら、血の吸ひあひをしたり、踏んだり、殴つた

りすることだらう。人々を鐵砲や棍棒や石にかへて言ふには——これが……

彼は更に母親に近寄つた。

——是は——罪惡です、母さん！ 數百萬の人間の最も汚はしい殺戮です、——魂の殺戮です……
 わかりますか、——魂を殺すことです。我々と奴等の相異を見て御覽なさい——毆つた者は、氣持が悪く恥かしく、苦しい。——氣持が悪い、これが大切なことです！ が彼奴等と來たら——何千人といふ人間を平氣で、憐みもなく、同情もなく、殺してゐます！ そして單に銀や金や無價値な紙片や總てこんな、彼奴等に支配權を與へる貧弱ながら、たを護るためだけに、總ての者を殺すのです。考へて御覽なさい——人々は自分を守るではありません、民衆の肉體によつて防禦し、人々の魂を歪めながら、それを自分の爲にするのでなく、——自分の財産の爲にするのです。内側から自分を守るのではなく、外側から……

彼は彼女の手をとつて、身を屈めた。そしてそれを振りながら言つた。

——若し母さんが總てのこの汚穢さや恥づべき腐敗を悟つて下さつたら——母さんはきつと我々の眞理を理解し、——それがどんなに偉大で輝かしいかを知つて下さるでせうにね！……

母は胸を波うたせ、息子の心臓と自分の心臓を一つの火に融かしたいといふ欲望で一杯になりながら、立ち上つた。

——お待ち、パーシヤ、——お待ち！——息を切らせながら彼女は口ごもつた。——私は——悟るよ、——待つてお呉れ……

二十五

土間で大きな物音を立てるものがあつた。彼等は二人ともびくつとして、互に顔を見合せた。

戸がゆつくりと開いて、その中へのつそりとルイビンがはいて來た。

——やあ！——頭を上げて微笑しながら、彼は言つた。——我々のフォーマさんは何にでも釣られる——パンにでも、酒にでも。挨拶しなせえ……

彼はタールに汚れた半外套を着て、木靴を履いてゐた。帯の間から眞黒な手袋を突き出し、頭には毛帽を被つてゐた。

——お達者かな？ 放免になつたんだね、パーヴェル？ ふん。どんな鹽梅だね、ニロウナさん？
 ——彼は白い齒をむき出して大きく微笑んだ。彼の聲は以前よりやはらかで、顔は更に濃く髭が伸びてゐた。

母は喜んで彼に近づき、彼の大きな、眞黒い手を握つた。そして健康な、激しい、タールの香を吸

ひながら、言った。

——おや、お前さん……さう、よかつたね……

パーヴェルはルイピンを眺めて微笑した。

——いゝお百姓だ！

ゆつくりと外套を脱ぎながら、ルイピンは言った。

——えい、また百姓になりましたわい。貴方はちよつぱり旦那衆になりやしたな。が私は——後戻り……えい！

斑色のシャツを引張りながら、彼は部屋に通つた。注意深い眼附で眺めまはして、言った。

——道具は別にふえとらんが、本が澤山になりましたなあ！それで仕事の方はどうなんですか

Se.

彼は兩足を開いてゆつくりと坐ると、膝に掌をついて寄りかかつた。そして暗い眼でパーヴェルを物問ひたげにじろじろ眺めながら、人のよさそうに微笑んで答を待つた。

——仕事は景氣よく行きます！——パーヴェルは言った。

——鋤いて蒔かう、自慢するのが能ぢやなし。取入をすましたら——濁酒でもたいて、腰を伸ばそ

う——かうですかい？——ルイピンは洒落れて言った。

——貴方の方はどうです？ ミハイロ・イワノギツチ？——パーヴェルは彼の眞向ひに坐りながら尋ねた。

——別に。機嫌よく暮してゐます。エギリチエラに暫くゐました。聞いたことがありますか？
——エギリチエラ？ よい村ですわい。年に二度市が立つて二千人以上も住んでゐます、——悪い奴でさあ。土地がないので、賃貸りをしてゐます。瘦せた土地ですわい。私はある強慾者のところへ備はれました——死骸にたかつた蠅のやうなものですわい。タールをとつたり、炭を焼いたりするんです。賃銀は四倍も少いの、骨の折れることと來たら此處の三倍です、——えい！ 我々の連中はその強慾者のところに七人ゐました。いや、——皆若い奴で、私の他は土地のものでさあ、——皆讀み書きが出来ました。一人のエフイムと言ふ若いのなんぞ、とても怒りぼくつて、災難でさあ！

——貴方はその連中とどんな話をしたのですか？——パーヴェルは活氣づいて尋ねた。
——黙つちやゐませんよ。私はこゝのピラを全部持つて行きました——三十四枚とも。然し私は聖書の方をよけいに使ひます、あれには身になることがありますわい。でつかい本で、お上で出來て、總會が刷つたんですから、信じる事が出來ますあ！

彼はパーヴェルに瞬いて見せ、それから薄笑ひながら言ひ續けた。

——是れだけちや足りません。私はお前さんそこへ書物を貰ひに來ました。エフイムと二人で——

タールを運んで来たので、えい、廻り道をしてお前さんかたへ寄つたんです、エフイムが来ない間に本を貰ひたいんで、——彼奴にはいらんことを聞かさん方がえいから……

母はルイビンを見て、彼が長いジャケットと一緒にまだ何かを脱いだやうに思つた。手堅いところが少くなり、眼は前のやうにあけつばなしでなく、狡るやうに眺めてゐた。

——母さん、——パーヴェルは言つた、——ちよつと行つて本を貰つて来て下さい。向ふで何を渡したらよいか知つてゐます。田舎用のを——と言つて下さい。

——いゝよ！——母は言つた。——サモワルも出来たら——行つて来よう。

——お前さんもそつちの方をやるやうになつたのですかい、ニロウナさん？——にやにや笑ひながらルイビンは訊ねた。——さうですか。我々の方や本好きな連中が澤山ゐます。先生がしこんだんです、——皆よい若者だと言つてますわい、たゞ坊さんの出身ですがな。女の先生も七露里ほど離れたところにゐます。えい、その人たちは發禁本で運動してやしません。お上の人ですから——こわがつてゐるんです。私が私は發禁本の、激しい奴がほしいのです、——私はこつそりとあの人達の影にまはつて……若しも署長さんや坊さんにその本が見つかつて、——先生が撒いた！——と思ふでせう。私はそつと脇の方で時機を待つと言ふ算断です。

彼は自分の名案に満足して、愉快そうに齒をむき出した。

——まあお前さんつたら！——母は思つた。————鰐に見せかけて、狐のやうに立ち廻ると言ふのがこれだ……

——どう思ひますか、——パーヴェルは訊ねた。——若し先生連が發禁本を撒いたと言ふ疑ひで——その爲に監獄に入れられたら？

——入れられる、——それがどうしたんですかい？——ルイビンが訊ねた。

——パンフレットを配つたのは貴方で、——彼等ではない！——と言ふことになれば、貴方は監獄へ行かねばなりませんよ……

——變なことを言ふ人だ！——手で膝を叩いてルイビンは薄笑つた。——誰が私だと思ひますか？——水呑百姓がこんな仕事にかゝらふなんてあることですか？——本ちうものは且那衆の仕事で、その人達はその責任をもたにやなりませんわい……

母はパーヴェルがルイビンを理解してゐないと思つた。そして彼が隣きをした、つまり、腹を立てゝゐるのを知つた。彼女は用心深く、物やはらかに言つた。

——ミハイル・イワノギツチはかうしたいと言ふのでせう、仕事は彼がやるから、罪を誰か他の者が代りに引き受けて欲しいと……

——そのとほり！——ルイビンは頸鬚を撫でながら言つた。——こゝ暫くの間。

——母さん！——パーヴェルはそつけなく叫んだ。——若し我々の誰かが、たとへばアンドレイも宜しい、私をつかつて何かをして、その結果私が監獄に入れられるとしたら——母さんは何と言ひますか？

母はびくつとして、ためらふやうに息子を見つめてゐたが、やがて否定的に頭を振りながら言つた。

——そんなことで仲間を賣つてよいものかい？

——あーあ！——ルイピンは言葉尻を長くひいて言つた、——わかつたよ、パーヴェルさん！

嘲笑的に瞬きをして、母に向つて彼は言つた。

——かみさん、こりや難しい問題ですわい。

そして再び教へるやうにパーヴェルに。

——お前さんの考へ方はまだ若い！ 秘密な仕事に——徳義心もへちまもあるもんですかい、考へて見ねえ。第一に、監獄へほりこまれるのは、眞先きに、本を見つかつた青年で、先生ではありません、——これが一つ。第二に、先生は検定本を教へてゐると言ふものの、そこに書いてあることと言へばやはり禁止本にあると同じで、唯文句が違ひ、眞理が少いだけであらう、——これが二つ。つまりあの人達だつて私と同じことを欲してゐるんだが、唯あの人達は横道を行き、私は本道を歩くと云ふだけのことですから、——お上の前ちや同罪だと言ふんです、さうでせう？ 第三に、私にやあの連

中と何の縁故もありませんわい、——てくる人間は騎馬車の仲間ぢやないと言ふことがありますからなあ、百姓には不利益な事はそんな譯でしたくありませんわい。あの連中と言へば——坊さんの息子や、そうでなきあ——地主の娘だから、——なぜあの連中に人民を起させる必要があるのか——私にはわかりませぬわい。且那衆の考へと言ふものは、私のやうな百姓にはわからんもんでさあ、私は自分でやることは——分つてますが、あの連中のしたがることは——知れませぬわい。長い間念入りに且那面をして、百姓の皮をひんむいて置きながら、不意に——眼が覺めたと言つて百姓に眼をこすらせようと言ふんでさ。私はお伽話といふ奴が好きぢやありませんわい、がこれと來ちや——全くお伽話でさあ。私にやどんな且那も縁遠いものです。冬に野原を歩いて見ねえ、前の方では何か生物らしいのがちらちらする、はて何だらう？ 狼か、狐か、それとも唯の犬か、——わかりませぬわい！ 縁遠いものでさあ！

母は息子を見た。彼は悲しげな顔つきをしてゐた。

然しルイピンの眼は暗い光に輝いてゐた。彼はさも満足げにパーヴェルを見た。そして焦々と指で髭をほぐしながら言ふのであつた。

——御機嫌を取つてゐる暇なんかありませんわい。生活は嚴かに見てゐますわい。犬小舎と——羊小舎はまた別で、それぞれ違つた吠えかたをすれば言ふものですわい……

——旦那衆のうちにも、——知人の顔を思ひ出しながら、母は言ひ始めた。——民衆の爲に我と我身をころしたり、一生監獄で苦しんだりする人もありますが……

——そんな連中は何か特別な思惑があるんでさあ！ ルイピンが言つた。——百姓が裕福になりや旦那衆の中に割りこんで行くし、旦那衆が貧乏すりや——百姓になり下る。財布が空になれば心も思はず綺麗になると言ふのですわい。パーヴェルさん、お前さんはいつか人は暮し方によつて考へ方も違ふ、労働者が『よし』といふ場合に、主人は『いや』と言ふに違ひないし、労働者が『いや』と言へば、主人はその性質上嫌でも『よし』と叫ばにやならんと教へてくれたつけ！ つまりそんな風に百姓と旦那はそれぞれ性質が違つてゐるのですわい。百姓が満腹してりや——旦那は夜も眠れない、勿論碌でなしは——何處にでもあることだから、百姓ならどんな奴の味方にでもなるとは私は言ひませんわね……

彼は、どす黒い、力の強さうな彼は、立ち上つた。彼の顔は曇り、顎は額へた。恰もそつと齒を鳴らしたやうであつた。そして聲を低めて語り續けた。

——私は五年間方々の工場をうろつきまはつて、田舎にはとんと御無沙汰してゐましたつけ！ 今度そちらへ行つて、見て來たんですが、——私にはあんな暮しは出来ませんわい！ え、出来ませんわい！ まあ暮して御覽なせえ——あんな屈辱つてあつたもんぢやありません！ そこでは飢が人

間の後に影のやうに這つてゐますさあ。パンなんか望んでもありやしません！ 飢は魂を一呑みにし、人間らしい顔つきを擦りけしてしまつた。人間は生きてゐるんぢやなくて、どうとも出来ない貧乏の中で腐つてゐるんです……それに周圍からはお上の役所が、お前のところは餘つたパン片がないかと鳥のやうに見張つてゐますわい、見りや、反吐をついて、顔をしかめまさら……

ルイピンはあたりを眺めてから、机に手をついてパーヴェルの方に身を屈めた。

——私は二度目にこの生活を見た時、げつそりしましたわい。見る、——どうにもならん！ 然し私は自分に打ち勝ちました。魂よ、元氣を出せ、かう思ひました。私は立ち留らう。パンを呉れてやる事が出来なくても、せめて粥なりと煮てやらう、——え、きつと煮てやりますわい！ 人の屈辱を我身に引き受けてやらう。それは私の心の中にナイフのやうに突立つて、揺れてゐますさあ

彼の頭は汗ばんだ。彼はゆつくりとパーヴェルに迫りながら、片手をその肩に載せた。手は顎へてゐた。

——私に手傳つて下せえ！ それを讀んだら誰でもちつとしてゐられなくなるやうな本を下せえ。針鼠を頭の中に入れてかにかやならん、鋭い猪を！ お前さん方の爲に書いてゐる町の人に——村の爲にも書いて呉れるやうに言つて下せえ！ 村が火傷をして、——民衆が半死になるほど、ひつばたいでもよいのですわい……

彼は片手を舉げた。そして一語一語區別して發音しながら、低い聲で言った。

——死を死でなほす——これだ！ つまり——人々を蘇らせるために死ぬと言ふんでさあ。地上の何億といふ民衆を蘇らせるためには、千人や二千人死んだつてようがすわい！ え、死ぬことはたやすいもんでさあ。蘇つて呉れりや！ 人々が向上して呉れりや！

母は横眼でルイビンを見ながら、サモワルを運んで來た。彼の重い、力強い言葉は彼女を壓しつけた。彼のうちには何だか彼女をして自分の夫を思ひ出させるものがあつた。彼女の夫も——同じやうに齒をむき出し、袖をたくし上げて手を振つた。彼のうちにも同じやうに性急な憎悪、性急だが、口のきけない憎悪が糞食つてゐた。たゞルイビンは——物語つた。そして夫ほど恐くはなかつた。

——それは必要だ！——パーヴェルは頭を振り立て、言つた。——材料を下さい、新聞に書きませう……

母は微笑を含んで息子を見た。頭を振つて、黙つて身拵へをして出て行つた。

——やつて下せえ！ みんな揃へまさあ、誰でもわかるやうに簡単に書いて下せえ！——ルイビンは叫んだ。

臺所の戸があいて、誰かがはいつて來た。

エフイムだ！ 臺所を覗きながら、ルイビンは言つた。來いよ、エフイム！ さあ——エフ

イム、——この人は——パーヴェルさん、私がよくお前に話して聞かせた人だ。

パーヴェルの前に、手に帽子を持ち、灰色の眼で顔越しに彼を眺めながら、亚麻色の髪の毛、顔の広い若者が、短い半外套を着て立つてゐた。均整のとれた、力の強そうな男であつた。

——今日は！——皺がれ氣味の聲で彼は言つた。それからパーヴェルの手を握つて、両手で眞直ぐな髪を撫でた。部屋を一渡り見廻はすと直ぐ様ゆつくりと、恰も足音を盗むやうにして、書棚の方へ歩いて行つた。

——見つけおつた！——パーヴェルに眼で知らせながらルイビンは言つた。エフイムは振り返つて彼を見つめた。それから言ひながら、書物を調べ始めた。

——澤山本がありますねえ！ が、きつと読む暇なんかないでせう。田舎ぢやこんなことにはよけいに時間があります……

——然し讀みたがらないでせう？——パーヴェルは訊ねた。

——どうして？ 讀みたがつてゐますよ！——腮を擦りながら若者は答へた。——大部頭が動いて來ました。『地質學』——これは何ですか？

パーヴェルは説明した。

——俺いらに必要がない！——若者は書物を棚に置きながら言つた。

ルイピンは騒しく息をついて、口を入れた。

——百姓の面白がるなあ、大地がどこから出て来たかと言ふのぢやなくて、どうしてそれがてんでに分けられたか、——つまり旦那衆がどうして民衆の足もとから大地を引っこ抜いたかと言ふことさあ。それがちつとしてゐるか、或は廻つてゐるかなんか問題ぢやねえ——お前さんがそれを縄でつるそうと、——食はして呉れりやそれでよいし、空に釘で打ちつけよう——養つてくれりやそれで結構なんでさあ……

『奴隷史』再びエフイムは讀んだ。そしてパーヴェルに聞いた。

——俺いらの事ですか？

——農奴制度に關するのがあります！——パーヴェルは彼に他の書物を渡しながら言つた。エフイムはそれを取つて、手の中でひねくりまはした。それから脇の方に置いて、落着いて言つた。

——これは——もう過ぎた！

——貴方は自分で——土地を持つてゐるのですか？——パーヴェルは聞いた。

——俺いら？ 持つてゐます！ 俺いらは三人兄弟ですが、土地と來ちや——四デシヤチン。

砂地で——銅を磨くにはもつて來いですが、麥を作るにや——からきし駄目な土地です！……暫く黙つてから、彼は言ひ續けた。

——俺いらは土地と縁をきりました——土地で何ですか？ 食はすこともしくさらないで手間を

取るだけでさあ。もう四年間働き人の間を渡り歩いてゐます。秋にや兵隊に行くことになつてゐるんです。ミハイロ伯父さんは——行くな——と言ふんですがね。今ちや兵隊は人民を欺すからと言つて。軍隊はスチエバン・ラージンの時も、ブガチョフの時も、人民を殺しました。いゝ加減に止させてよい時分ですあ。貴方の御考はどうですか？——彼はちつとパーヴェルを見ながら尋ねた。

——よい時分です！——パーヴェルは微笑を以て答へた。——たゞ——難しいでせう！ 兵隊に語つて聞かせることや、その方法を知らねばなりません。

——勉強すりや——出來るでせう！——エフイムは言つた。

——若し官憲がそのことで逮捕するとなれば——射殺出來ます！——パーヴェルは好奇心を以てエフイムを眺めながら、言葉を結んだ。

——あいつは——容赦しません！——落ちついて若者は同意した。そして再び書物を調べ始めた。

——茶を飲めよ、エフイム、もう直ぐ行かにならん！——ルイピンが注意した。

——直きに！——若者は應じた。そして再び尋ねた。

——革命ちうのは——一揆ですか？

——アンドレイがはいつて來た。眞赤に温まつて、陰氣な顔つきをしてゐた。黙つてエフイムの手を握

ると、ルイピンの隣に腰掛けた。そして彼を見て薄笑つた。

——何だつてそんな面白くもねえ見方をするんですかい？——ルイピンは彼の膝のあたりを拳で叩いて訊ねた。

——うん、さう、小ロシア人は答へた。

——やはり勞働者ですかい？——エフイムがアンドレイの方に頭を振つて見せながら聞いた。

——やはり！——アンドレイが答へた。——それでどう？

——あれは工場の人には初見参でさあ！——ルイピンが説明した。——何だか違つてゐるとか言つてますわい……

——何處が？——パーエルは訊ねた。

エフイムは注意深くアンドレイを見て言つた。

——貴方は骨が角張つてゐます。百姓はもつと丸みがあつて……

——百姓はもつとどつしりと立つてゐる！——ルイピンは言ひ添へた。——彼奴は自分の下に大地を感じてゐる、たとひそれがなくても、彼奴は感じてまさあ——大地！——が工場の連中は鳥のやうなもんで——故郷もな付れば、家もない、今日は——此處、明日は彼處と言ふ具合です！——女だつて彼を一所につないで置けない、直ぐに——あばよ、勝手にしろだ！——そして他の所へもつとよい奴を探

しに行きまさら。が、百姓は場所を動かないで、自分の周圍によいのをこさへようとしませう。それがゝのが来たといふ所ですわい！

エフイムはパーヴェルのもとに近寄つて尋ねた。

——なんか本を借して呉れますか？

——どうぞ！——パーヴェルは喜んで應じた。若者の眼は貪るやうに燃えあがつた。彼は早口に言ひ始めた。

——俺^{わが}いらは連れて來ます！——俺^{わが}いらの連中はつい近所までタールを運んで來るのです。奴等も來ます。

既に身拵へをして、きちんと帯をしめたルイピンはエフイムに言つた。

——行かう、遅くなる！

——さあ、讀むんでさあ！——エフイムは書物を指差して、大きく微笑しながら叫んだ。彼等が立ち去つた時、パーヴェルはアンドレイの方を向きながら活氣づいて叫んだ。

——見たか？……

——うーん！——ゆつくりと引き伸して小ロシア人は言つた。——雨雲のやうだな……

——ミハイロと言ふ人は——母が叫んだ。

——工場で暮したこともなかつたやうに、すっかり百姓になつたのね！ 何て恐い人だらう！

——君がゐなかつて残念だつた！——パーヴェルはアンドレイに言つた。アンドレイは卓子の脇に腰掛けて、陰氣に自分の茶碗を眺めてゐた。——心の遊戯が見られたのに、——君はいつも心のことを話すからなあ！ が、ルイピンと來たら別物だ、——僕をひつくりかへして、絞めつけるんだ！ 僕は彼に言ひ返へすことが出来なかつた。彼はどれほど人々に不信を抱いて、——どんなに安く彼等を見積つてゐるか！ 母が言つたのは本當だ。あの人間は恐ろしい力をたづさへてゐる！……

——それは僕も見た！——陰鬱に小ロシヤ人が言つた。——民衆はそこなはれてしまつた！ 彼等が起つ時には——彼等は全然計畫をひつくりかへしてしまふだらう！ 彼等には裸の土地が必要なんだ、——それで彼等は大地を裸にし、すっかりひきはいでしまふんだ！

彼はゆつくりと語つた。何か他のことを考へてゐるのがよそ眼にも見えてゐた。母は用心深く彼に觸つた。

——さつぱりとしないよ、アンドリューシヤ！

——待つて下さい、おばさん！——靜かに、愛想好く小ロシヤ人は頼んだ。

そして興奮しながら、手で卓子を敲いて言ひ始めた。

——さうだ、パーヴェル、百姓はもし彼が立ち上れば土地を裸にしてしまふ！ ベストの後のやうに

——彼は總てに火をつけて、自分等の屈辱の痕を一つ残らず灰にして吹き散らすだらう……

——その後で我々は道に立たねばならん！——靜かにパーヴェルは口を入れた。

——我々の仕事は——これをさせないことだ！ 我々の仕事は、パーヴェル、彼をひきとめることだ！ 我々が皆でもつと彼に近づけば、——彼も我々を信賴し、我々の後について來るだらう！

——君、ルイピンが農村の爲に新聞を出して呉れと言つて來てゐるよ！——パーヴェルが告げた。

——是非必要だ！

——パーヴェルは苦笑して、言つた。

——僕は彼と議論しなかつたので蟲がおさまらない！

——小ロシヤ人は頭をこすりながら、落着いて自分の考を述べた。

——また議論する時があるよ。君は自分の笛を吹け。足が地に生えてない連中は、君の音楽に連れて踊るだらう！ ルイピンは本當の事を言つた——我々は足もとに大地を感じてゐない。また感じてはならん。なぜつて言へば我々の爲にはそれを揺すぶるやうになつてゐるんだから。一度揺すぶれば——人が落ちる二度揺すぶれば——更に！

母は苦笑しながら言つた。

——アンドリューシヤ、お前さんにかゝると何でも雜作ないね。

——え、さうです！——小ロシヤ人が言った。雑作ない！生活と同じですよ！五六分の後彼は言った。

——僕は原つばへ行つて、少し歩いて来よう……

——風呂にはいつた後で？ 風があるから、湯さめがするよ！——母は注意した。

——冷まして来なくちや！——彼は答へた。

——見て居給へ、風邪をひくから！——愛想よくパーヴェルが言った。——寝る方がいいよ。

——いや、行つて来る！

そして身拵へをして黙つて出て行つた……

——あの人は悩んでゐる！——母は溜息をついて言った。

——知つてゐますか、——パーヴェルは彼女に言った、——母さんはよい事をしましたよ、あれから彼と『お前さん』で話をするやうになりましたね！

母は驚いたやうに彼を見て答へて。

——私はちつとも気がつかなくつた。——あの人は私にとつて非常に近かしくなつたので、——ど

う言つてよいか分らないんだよ！——母さんの心掛は立派ですよ！——静かにパーヴェルが言った

——たゞね、お前や——皆さんに、——せめて何かの手助けになつたらと思ふんだよ！——出来たら

ね！……

——びくびくすることはありません——出来ませよ！……

彼女は言ひながら静かに言ひ出した。

——さうは言つても、びくびくでもしてゐなければ、私は何も出来ないんだよ！

——いいですよ、母さん！——黙りませう！——パーヴェルは言った。——私はね——大變、大變母

さんに感謝してゐるんですよ！

彼女は自分の涙で彼を當惑させまいとて臺所へ出て行つた。

小ロシヤ人は夕方遅くぐつたりと疲れて歸つて来た。そして直ぐ様床に就きながら言つた。

——十露里ばかりも走つたと思ふ……

——效き目があつたかね！——パーヴェルは尋ねた。

——邪魔するな、寝るんだから！

そして死んだやうに黙つてしまつた。

暫くするとヴェソフシチコフがやつて来た。汚い襪を着て、いつものやうに不平面をしてゐた。

——誰がイサイを殺したか聞かなかつた？——彼は無器用に、部屋を歩きながら、パーヴェルに聞いた。

「いや！——パーヴェルは短く應じた。

——洒落れた眞似をする奴もあるものだなあ！ 俺はずつと自分の手で彼奴をやつつけてやらうと考へてた。これは俺の仕事だ、——最も俺に適した仕事だ！

——ニコライ、そんなことを言ふのを止せ！——パーヴェルはやさしく彼に言った。

——ほんとにどうしたんだよ！——愛想好く母が引き取つた。氣立のよい辭に、自分で——吼えたりして。どうしたと言ふの？

この瞬間、彼女にはニコライを見るのが快かつた。彼の痘痕面さへいつもより美しく見えた。

——俺はこんな仕事の他にや、何の役にも立たねえんだ！——肩をすぼめながらニコライは言つた

——俺は随分考へた——俺の役目は何處にあるかつて？ 何處にもない！ 民衆に話さにやならんと言つても、俺は——出來ねえ！ 俺は色んなことを見てるし、民衆の屈辱もすつかり感じてらあ——が話すことは——出來ん！ 啞の魂だ。

彼はパーヴェルの方に近寄つた。そして頭を垂れ、指で卓子を弾きながら、なんだか子供っぽい調子で、彼に似氣なく泣言を並べるのであつた。

——俺に何でもよいからがつちりした仕事を呉れる！ 俺はこんなにして無意味に生きてゐられな

い！ お前さん達は皆仕事をしてゐる。俺はそれが伸びて行くのを——見てるだけで、——俺はと言へ

ば——除けもんだ！ 俺は材木や板を運んでゐる。こんなことの爲に生きることなんか出来るかい？ がつちりした仕事を與へて呉れる！

パーヴェルは彼の手をとると、彼を手もとに引き寄せた。

——あげよう……

然し敷居の外から小ロシア人の聲が聞えた。

——ニコライ、俺はお前に植字を教へてやらう。そしてお前は我々の方の植字工になるんだ、——

い、かい？

ニコライは彼の方に行きながら、言つた。——教へて呉れるんなら、俺はその代りお前さんにナイフをあげる……

——ナイフなんか糞食らへだ！——小ロシア人は叫んだ。そして不意に笑ひ出した。

——い、ナイフだよ！——ニコライは言ひ張つた。パーヴェルも笑ひ出した。

その時ヴェソフシニコフは部屋の眞中に立ち止つて、尋ねた。

——それはお前さん、俺のことを笑つてるのかい？

——うん、さうだ！——小ロシア人は寢臺から飛び降りて答へた。——さあ——野原へ行かう、歩

きに。素的な月夜だぜ。行かないかい？

——よからう！——パーヴェルが言った。

——俺も行かう！——ニコライは言った。——俺はなあ、小ロシヤ、お前さんの笑ふ時が好きだ……

——俺はまた——お前が物をやらうと約束する時よ！——小ロシヤ人は笑ひながら答へた。

彼が臺所で身拵へをしてゐる時、母は彼にうるさく言った。

——温かに行きな……

彼等が三人で出て行つた時、彼女は、窓越しに彼等を眺め、聖像を見つめた。そして小聲で言った。

——主よ——あれらを助けてやつて下さい！……

二六六

日は一日一日と母をして五月一日の事を考へさせる暇のないほどの早さで飛び去つた。たゞ夜毎、騒々しい、厄介な日中の奔走に疲れた彼女が、床に就いた時なんか、彼女の心はひそかに疼くのであつた。

——早く来ればよいのに……

夜が明けると工場の汽笛が鳴つた。息子のアンドレイは手早く茶を飲み、食物を食つた。そして母

に澤山な用事を頼んで出て行つた。終日彼女は車輪の中の栗鼠のやうに駆け回り廻つた。食物を煮たり、宣傳ピラに使ふ藤色のジュラチンや糊をたいた。又誰彼の人が来てパーヴェルに手渡す書面を突込んで行つた。そして彼女に自分の興奮を移しながら、立ち去つたりした。

五月一日を祝ふために労働者を呼び集めるピラは、殆ど毎夜塀に貼られた。それらは警察の内から現はれ、又毎日工場でも発見された。毎朝警官は罵りながら場末町中を歩きまはつて、塀から藤色のピラをはがしとつた。然し晝飯頃には再び街の通りにひらひらと、通行人の足もとに散らばつてゐた。町から刑事が来た。彼等は町角に立ちながら、愉快に意氣こんで工場から食事に又はその反對に通ふ労働者を査べた。總ての者には警察の狼狽を見るのが面白かつた。それで年のいつた労働者でさへも嘲笑しながら互に言ひあふのであつた。

——何をしてやるんだ、——えゝ？

到る所に人だかりがして、熱心に煽動的召集の是非を議論した。生活は沸りかへつた。この春の生活は總ての者にとつて普通以上に興味深く、總ての者に何か知らん新しいものを持ち來つた。或る者には——謀叛人を悪し様に罵りながら、更に焦々する原因を、他の者には——漠然たる不安と希望を更に第三の者には——彼等は少數であつた、——彼等は萬人を覺醒させる力となるといふ意識の鋭き喜びを。

パーヴェルとアンドレイは殆ど毎夜眠らなかつた。彼等は二人ともはや汽笛の鳴るといふ前に、疲れて、聲をからして、青ざめて歸つて來た。母は彼等が森や沼地で會合してゐるのを知つてゐた。彼女には、毎夜場末町の周圍を騎馬巡查が乗りまはし、刑事が潛入して、勞働者を一人一人捕へて調べたり、集りを追拂つたり、又は時によると誰彼を逮捕したりするのが知れてゐた。息子とアンドレイも毎晩捕へられる可能性があるんだと悟りながら、彼女は殆どそれを望んだりするのであつた——その方が彼等にとつてましなやうに思はれるのであつた。

圖表係の殺人事件は不思議に音沙汰がなくなつた。二日間其地の警察はこの嫌疑で人々を訊問した然し十人餘りも調べると、警察は殺人事件に對する興味を失つてしまつた。

マリヤ・コルスノワは母との會話で、自分の言葉の中に他の誰でもと同様に親しくつきあつてゐる警察側の意嚮を反射させながら、言つたことがあつた。

——どうして犯人があがるものですか。その朝恐らく百人もの人がイサイを見たらし、そのうち九十人、それより多くないにしてもまあ九十人は、奴をどやしかなないのだからね。——この七年と云ふもの奴は皆の者に卑劣な眞似をして來たんだもの……

小ロシヤ人は眼に立つて變つて來た。顔の肉は削げた、脛は重さうに突き出た眼の上に垂れて、それを半分閉ざした。彼は日常の事物に就て語るものが少くなつた。然し益々興奮の度を増した。そ

して酔ひどれたやうな、總ての者を酔はすやうな陶醉に陥りながら、未來のことを語るのであつた。

——自由と理性の勝利を祝ふ、美しい、輝しい祭日のことを。

イサイの殺人事件が噂に上らなくなつた時、彼は厭はしげに、又悲しげに薄笑ひながら、言つた。

——民衆ばかりではない、奴等が犬として我々を捕へるに使ふ人間も——奴等には大切ぢやない。

自分の忠實なユダを惜しまないで——銀貨さ……

——それは極つてるさ、アンドレイ！——斷然とパーヴェルが言つた。母は小聲で附け加へた。

——朽木を押したので——碎けたまでぢやないの！……

——正當だが、然し——慰められない！——陰氣に小ロシヤ人が應じた。

彼はよくこの文句を言つた。そして彼の口にかゝると一種特別な意味を帯びるのであつた。廣い、悲しい、刺すやうな意味を……

——かくして遂にその日——五月一日が來た。

汽笛はいつものやうに要求的に又威壓的に鳴つた。一夜まんじりともしなかつた母は、寢臺から飛び降りて、宵から準備してあつたサモワルに火を入れた。いつものやうに息子とアンドレイの寢てゐる部屋の戸を叩かうかと思つた。然し暫く考へると、手を振つた。そして齒が痛むかのやうに顔に手を當て、窓の下に腰をおろした。

青ざめた藍色の空には、白い、薔薇色にそまつた薄雲の群が、汽笛の響におびやかされた大鳥の飛ぶやうに、速に流れてゐた。母は雲を眺め、又自分の胸に聞き入つた。彼女は頭が重かつた。不眠の爲に充血した眼はかさかさした。變な落ち着きが胸の中にあつた。心臓は滑かに脈搏つた。そしてたわいのないことが頭に浮んで來るのであつた。

——サモワルの用意が早過ぎたので、沸つてゐる！ 今日には出来るだけ長く寝させて置かう。二人ともえらい思ひをした……

窓には樂しげに戯れながら、若々しい太陽の光がさして來た。彼女はその下に手を置いた。そして輝かしい光が彼女の手の皮膚の上に横はつた時、彼女は考へ深く、愛想よく微笑みながら、靜かに今一方の手でそれを撫でた。それから立ち上つて、サモワルの煙突をとり、音のしないやうにと努めながら顔を洗つた。そして烈しく十字を切り、言葉なく唇を動かしながら、祈り始めた。彼女の顔は輝いて來た。右の肩はゆるやかに釣りあがつたと思ふと、また不意に垂れるのであつた……

第二番目の汽笛が聲を低めて叫び出した。それは前のやうに斷乎としたものでなく、幅広い、濕つた音響には顫へを帯びてゐた。母には今日に限つてそれはいつもより長く叫ぶやうに思はれた。

部屋では小ロシア人のよく透る、はつきりとした聲が響いた。

——パーヴェル！ おい。

二人の中のどちらかゞ素足で床を打つた。どちらかゞ心持よげに欠伸した。

——サモワルの用意が出來てゐるよ！——母は叫んだ。

——起きよう！——パーヴェルは愉快氣に答へた。

——太陽があがる！——小ロシア人が言つた。——雲が走る。こいつは今日は餘計者だ、——雲奴そして頭髮を亂し、寢呆け面をした彼が、然し快活に臺所へ出て來た。

——おはよう、おばさん！ よく眠りましたか？

母は彼に近よつて小聲で言つた。

——それぢや、アンドリユーシヤ、あれと並んでいらつてやい！

——勿論ですとも！——小ロシア人が囁いた。——我々が一緒にゐる限りは——どこへでも並んで行きます、——さう思つてゐて下さい！

——君達はそこで何の内緒話をしてゐるんだ？——パーヴェルが尋ねた。

——なんでもないよ、パーシヤ！

——おばさんが僕に言ふんだ——きれいに洗つて行けつて！ 娘つ子が見るからなあ——顔を洗ひに土間へ出ながら小ロシア人は答へて。

——立て、奮へ、勞働大衆よ——パーヴェルは小聲で口ずさんだ。

日は益々明かになつて行つた。雲は風に追はれて消えて行つた。母は茶器を集めて、頭を振りながら、何だか總てが變だと思つた。彼等二人は冗談口をきゝあつてゐるが、今朝微笑んだつて、眞晝には何が彼等を待つてゐるか——誰が知らう？ それに彼女自身も落着いてゐて、殆ど喜ばしくさへ思はれるのであつた。

待つ間を短くするために、長い間お茶を飲んだ。パーヴェルは何時ものやうに、ゆつくりと念入りに、茶碗の砂糖を匙で掻き廻はし、パン片——彼の好きな外殼に丹念に鹽をふりかけた。小ロシヤ人は卓子の下で足を動かしてゐた。——彼は決して一度で自分の足を具合よく置くことが出来なかつた。——そして液體に反射した日光が、天井や壁にちらちらするのを眺めながら、物語つた。

——僕が十ばかりの子供だつた時、太陽をコツプで掴へたくなつたんだ。そこで僕はコツプを持つて、忍び足で——壁にぶつつけた！ 手を切つて、その爲に殴られたよ。が殴られて外へ飛び出すと水溜に太陽があるぢやないか、えゝ、踏んでやれと思つてやつたんだ。そこら中泥だらけにして——また殴られた……どうしたらよからう？ そこで僕は太陽に怒鳴つてやつた。『痛くねえぞ、赤毛の畜生、痛くねえぞ！』そして長い舌を出してやつた。それで——蟲がおさまつたよ。

——なぜ君に太陽が赤毛に見えたんだい？——パーヴェルは笑ひながら尋ねた。
……うちの向ひに鍛冶屋さんで、赤毛の鬚髯を生やした眞赤な顔の男がゐた。愉快な、人のよい親

爺だつたがね。僕には太陽がその人そつくりと思へたんだ……

耐へきれないで、母は言つた。

——どんな具合にやるのか、その話でもしたらよいのに！

——決つたことを話すのはこんがらかせるだけです！——和やかに小ロシヤ人が考を述べた。——

若し我々が全部やられた時には、ニコライ・イワノギツチが貴方のところへ来て、どうすればよいか話すでせう。

——よろしい！——母が溜息をついて言つた。

——通りに出たいなあ！——夢見るやうにパーヴェルが言つた。

——いや、もう暫くうちにゐる方がよい！——アンドレイが應じた。——何故無益に警察の眼を痛める必要があるんだ？ 君はあいつらに結構よく知られてゐるからなあ！

フェーチャ・マージンが顔を輝かせ、頬に赤い斑點をつけて駈けて來た。動悸と歡喜に満ちた彼は待つ間の退屈を追ひやつた。

——始まつた！——彼は言ひ出した。——群衆が動き出した！ 通りに押し出して、皆斧のやうな面をしてるぞ。工場の門にはすつとヴェソフシチコフがワーシヤ・グセフやツモイロフと一緒に頭張つて、演説しとる。澤山家へ歸りおつた！ 行かう、丁度よい！ もう十時だ！……

——僕は行く——決然とパーヴェルが言った。

——見てろ——フェーチャが約束した——晝飯後には工場が全部立つから！
そして彼は駆け去つた。

——風にあつた蠟燭のように燃えてゐる！——母は静かな言葉で彼を送り出すと、立ち上つた。そして臺所に出て、身拵へを始めた。

——何處へ行くのですか、おばさん？

——お前さん達と一緒に！——彼女は言った。

アンドレイは口髯を引張つて、パーヴェルを見た。パーヴェルは素早い動作で頭の髪をなほすと、彼女の方へ出て行つた。

——私は母さんに何も言ひません……母さんも私に何も言はないで！——いゝですか？

——いゝよ、いゝよ、——機嫌よう！——彼女は呟いた。

二十七

彼女が通りに出て、空中に騒然と、待つところのある人聲のどよめきを耳にした時に、又窓や門口

や至る所に彼女の息子とアンドレイを好奇の眼をもつて見送る人の群を見た時に、——彼女の眼にはぼやけた班點が立ちふさがつて、時には透明な緑に、時には半濁の灰色に、その色彩を變化させながら、揺れ動き始めるのであつた。

彼等と挨拶をかはすものがゐた。その挨拶の中には何か特殊なものがあつた。ときれときれな、小聲の言葉が彼女の聴覺に聞えた。

——そら、あの連中が大將だ……

——誰が指揮するのか俺いらにはわからん……

——俺は何も悪いことを言つてやしないぢやないか！……

——脇の方の屋敷内で焦々しく叫ぶものがあつた。

——警察がふんづかまへりや、——逃げちやううんぢやないか……

——掴へた！

女連の金切聲が脅へたやうに窓から往來に飛び落ちた。

——しつかりしろ！ 何だね、この一人者？

工場から毎月傷害扶助を貰つてゐる足なしのゾシマの家の前を通つた時、彼は窓から頭を突き出して叫びだした。

——パーシユガ！ そんなことをしてゐると首を振られるぞ、待つてろ！

母は身顫ひをして立ちどまつた。この怒鳴り聲は彼女の胸に鋭い憎悪の感情を叫びおこした。彼女は不具者の腫れぼつたい、太つた顔を睨みつけた。彼は悪口をつきながら頭をすつこめた。そこで彼女は足を早めて息子に追いついた。そして彼から後れまいと努めながら、ついで行つた。

パーヴェルとアンドレイは何事も注意にとめる様子がなく、又彼等についてまはる喊聲も聞えないやうな風であつた。急ぐことなく、落着いて歩いて行つた。すると中年のつゝましやかな人間で、自分の眞面目な清い生活の爲に皆から尊敬されてゐるミローノフが、彼等呼びとめた。

——ダニロー、イワノギツチさん、貴方も仕事に出ないでせうね？——パーヴェルが訊ねた。

——うちぢや——家内が産氣づいてきましてな。——それにこんな、——不穏な日で！——ミロー

ノフは仲間をまじまじと眺めながら説明した。そして小聲で尋ねた。

——お前さん達は支配人に亂暴を企てゝゐなさるさうだが、硝子でもわるんですかい？

——まさか酔ひどれぢやあるまいし？——パーヴェルが叫んだ。

——我々はたゞ旗を持つて往來を歩き、歌を歌ふだけのことです！——小ロシア人が言つた。

まあ我々の歌を聞いて御覽なさい——あの中には我々の信念があるのです！

——お前さん達の信念はわたしも知つてまさあ！——考へこんでミローノフが言つた。——ピラを讀

みましたわい。おや、ニコウナさん！——彼は賢そうな眼で母に微笑みかけながら叫んだ。——お前さんも一揆をやることになつたのですかい？

——たとへ死んでも眞理と一語に歩かねばなりません！

——おやおや！——ミローノフが言つた。——道理で工場へ發禁本を持ちこんだのはお前さんだと

いふ噂があるんだな！

——誰がそんなことを言つてゐますか！——パーヴェルは訊ねた。

——え、そんな噂が専らでさあ！——では御免なせえ、——自重が大事ですぞ！……

母は静かに言つた。彼女はそんな噂が出るのを愉快に思つた。パーヴェルは薄笑ひながら彼女に言つた。

——監獄行きですよ、母さん！

太陽は自分の陽氣を春日の雄々しい新群さの中は注ぎながら、次第に高く昇つて行つた。雲は緩やかに漂ひ、その影は益々薄く、透明になつて行つた。それは和らかに往來や家々の屋根の上を這ひ、人々にまとひついた。それは恰も場末町を掃除するかのやうに、壁や屋根から塵埃を、人の顔からは退屈を、拭ひ去るのであつた。次第に賑やかになつて來た。聲は機械の轟きの遙かな物音をかき消しながら聲高に響いていつた。

再び母の耳に窓の中や屋敷内やその他至る所から、騒々しい毒舌や、考へ深い、樂しげな言葉が飛んで來た。然し今度は彼女は應酬や感謝や説明がしたくなつた。此の日の變に雑色な生活の中に交りたくなかつた。

町角の向ふの狭い横町に、百人ばかりの人だかりがして、その中からヴェソフシテコフの聲が聞えて來た。

——俺たちの血を野苺の汁かなんぞのやうに搾りやがるんだ！——群衆の頭の上に無器用な言葉が落ちた。

——その通り！——數人の聲が一度にどつと應じた。

——あいつがやつとるぞ！——小ロシア人が言つた。——さあ、行つて應援してやらう……

彼は身を屈めて、パーヴェルが引きとめる間もないうちに、コルクへ突込んだ栓抜きをのやうに、自分の長い、撓やかな身體を、群衆の中にもぐりこませた。暫くすると彼の調子のよい聲が聞えて來た。

——諸君！ 地上には種々雑多の民族が往んでゐると言ふ——猶太人に獨逸人、英國人に韃靼人。

が僕は——これを信じない！ たゞ二つの國民があるだけだ、敵同志の二つのノ種があるだけだ——金持と貧乏人！ 人間は様々な着物を着て、様々な言葉で話す、然し、よく見てみよ、金持の佛蘭西人や獨逸人や英國人やは労働大衆に對してどんな態度をとるか？ その時には彼奴等は總て労働者に

とつて——一樣にバシブズカ（土耳其の遊兵）であることがわかるであらう。奴等の喉笛に骨でも立ちやがれ！

群衆の中で誰かが笑つた。

——片一方の側から見てみよう、——すると佛蘭西人の労働者でも、韃靼人でも、土耳其人のもも皆我々ロシアの労働大衆と同様に犬のやうな暮しをしてゐることがわかるだらう！

通りから次第に多くの群衆が押し寄せて來た。人々は、黙つて、頸をのぼし、爪先を立て、續々と横丁に割りこんで來た。

アンドレイは聲を高めた。

——外國では民衆は既にこの簡單明瞭な歴史を理解して、今日、五月一日の榮えある日に……

——警官だ！——誰かが叫んだ。

通りから眞直ぐに横丁の人だかりを目ざして、四人の騎馬巡查が鞭を振りながら乗りつけた。そして叫んだ。

——解散しろ！

群衆は顔をしかめて、澁々馬に道を譲つた。扉に割りこんだものもあつた。

——馬に豚を乗つけて、ブーブー鳴いてやがる——さあ、俺いらは大將様でえ！——誰かのよく透

る喧嘩早い聲が叫んだ。

小ロシア人はたゞ一人横丁の真中に踏み止つてゐた。二頭の馬が頭を振り立てながら、彼の方へ迫つて来た。彼は身をかはした。それと同時に母は彼の手を掴へて、ぶつぶつ言ひながら手許に引いた。

——パーシャと一緒にと約束した癖に、自分一人で危い藝當をして！

——悪かつた！——小ロシア人は微笑しながら言つた。

不安な、ぐつたりするやうな疲労がニコウナを捕へた。それは内部から頭をもたげて、心の中に悲哀と歡喜を變な具合に交替させながら、眩暈をさせるのであつた。早く晝飯の汽笛が鳴つてほしいと思はれた。

廣場に出て、教會の方へ向つて行つた。教會の内外にはぎつしりと群衆が詰つてゐた。此處には五百に餘る愉快な若い連中がゐた。群衆は波うつた。人々は不安に頭を上向けて、待ち遠しそうに、遠く四方を眺めるのであつた。何かしらん高調したものが感じられた。或者はぼんやりと眺めてゐた。他の者は空元氣をつけてゐた。女連の息をつめたやうな聲がぼそぼそと響いた。男子連は腹立たしげにその連中から顔をそむけた。時々小聲の罵聲が起つた。敵意を含んだ軋轢の漠然たる騒音が斑色の群衆を捕へた。

——ミーチエンカ！——女の聲が小聲に頼へた——わが身を考へな！……

——ほつとけと言つた！——答が響いた。

又一方ではシーゾフの端嚴な聲が平靜に、確信をもつて語るのであつた。

——いや、我々は若い連中を排斥してはならん！ 奴等は俺達よりはうんと伶俐になつてるし、勇敢に生活しとる！ 沼のコベツクを拒絶したのは誰だつたんだい！ 奴等ぢやないか！ これは覺えて置く必要がある。奴等はこの爲に監獄に放り込まれた、——然しそのお陰で萬事うまい具合に行つたではないか！……

汽笛が吼え始めて、その黒い響の中に人聲を呑みこんだ。群衆は戰慄した。坐つてゐたものは立ち上つた。一瞬間あたりは靜まり返つて、きつとなつた。顔を青さめた者も澤山ゐた。

——諸君！——響高い、しつかりした、パーヴェルの聲が起つた。乾いた、熱い霧が母の眼を焼いた。彼女は不意に硬直した體の一動作で息子の後に立ちあがつた。皆はパーヴェルの方を振りむいて、磁石の一片に引きつけられた鐵粉のやうに、彼の周圍を取り卷いた。

母は彼の顔を見た。たゞ自負する所のある、勇敢な、燃えるやうな眼だけが見えた……

——諸君！ 我々は我々が如何なる者であるかを公然と宣言することにしました。我々は今日我々の旗を、つまり理性の旗、を眞理の旗自由の旗を高くさしあげるのです！
白い、長い旗竿が空中に閃き、傾き、群衆を割つて、その中に消えた。一瞬の後、仰向いた人々の

顔の上に、勞働大衆の旗の廣い布が赤い鳥のやうに翻つた。

パーヴェルは片手を高くさし上げた。——旗竿はゆらゆらした。その時數十の手が白い滑かな木を掴へた。そのうちには彼の母の手もあつた。

——勞働大衆萬歳！——彼は叫んだ。

數百の聲がどよめきとなつて彼に和した。

——諸君、我が黨にして、我が心の故里なる、社會民主勞働黨萬歳！

群集は沸り返つた。この旗の意義を解する者は群集を掻きわけて旗の方へと脱け出て來た。パーヴェルと竝んでマージン、サモイロフ、グセフ兄弟が立つた。ニコライは頭を傾けて群衆を掻きわけて來た。その他母の知らない若干の若い人達が燃える眼を以て彼女を突き除けるのであつた……

——世界の勞働者萬歳！——パーヴェルが叫んだ。すると益々力と歡喜の度を増しながら、數千人の反響が魂をゆり動かす響となつて彼に答へるのであつた。

母はニコライとまだ他に誰かの手をつかまへた。彼女は涙の爲に胸がつまつた。然し泣き出さなかつた。彼女の足は顫へた。わななく唇を以て彼女は言つた。

——身内の人々……

ニコライの痘瘡面には大きな微笑が漂つた。彼は旗を見た。そしてその方の手を伸して何か呟いた。

それから不意にその手で母の頸をつかまへて、彼女を接吻した。そして笑ひ出した。

——諸君！——自分の和い聲音で群集のどよめきを包みながら、小ロシヤ人は歌ふやうに言ひ出した。——我々は今や新しい神、光と眞理の神、理性と善の神の名に於て、十字架の道を行つた！我々の目的は遠く、荆棘の冠は——近い！眞理の力を信じない者には、死を賭してそれを守る勇氣がない。自分を信じない者、苦難を恐れる者は——我々を離れて脇によれ！我々は我が勝利を信する者を味方に呼ぶのだ。我が目的の見えない者は——我々と共に行かなくともよい、そんな奴には確なことがないのだ。諸君、隊列を作れ！自由人の祭日萬歳！五月一日萬歳！

群集は更にぎつちりと詰め寄つた。パーヴェルは旗を振つた。それは空中にはためいた。そして太陽に照らされ、赤く、廣やかに微笑みながら、前の方へと漂つて行つた……

——『古き世界を捨て……』

フエーチャ・マージンの卍高い聲が起つた。すると數十の聲が和い、力強い波となつて和した。

『その塵を我等の足より拂ひ去れ……』

母は唇に熱い微笑を浮べて、マージンの後から歩いて行つた。そして彼の頭越しに息子と旗を眺めてゐた。彼女の周圍には喜ばしげな顔や、雑多な色の眼がちらついた——皆の前には彼女の息子とアンドレイが歩いて行つた。彼女は二人の聲を聞いた——アンドレイの和い、温ひのある聲は、彼女の

息子の幅廣いバスと、一つの音に仲好く融けあつてゐた。

『立て、奮へ、労働大衆よ、

立ちて奮へ、飢ゑたる者よ！……』

人々は赤旗を迎へに走つて來た。彼等は何ごとかを叫び立て、群集に交りあひ、それとともに引返して行つた。すると彼等の叫びは歌の響の中に消え去つた。——その歌は家の中で他の物より小聲で歌はれたものだ——今往來でそれは滑かに、公然と恐ろしい力を以て、流れるのであつた。その中には鐵のやうな雄々しさが鳴り響いてゐた。そして人々を未來への遙かな道程に呼びながらも、それはその道の困難さを正直に語つてゐた、その大きな、物に動じない焰の中には、生活の薄黒い金滓や日頃の感情の重い魂が漂ひ、新しいものへの呪はしい恐れが灰燼に歸してしまふのであつた……

誰かの脅えた、喜ばしさうな顔が母の隣りに揺れ動いた。そして顫へる聲で喉にかすらせながら叫んだ。

——ミーチャ何處へ行くの？——

母は足の運びを止めないで言つた。

——行かせなさい、——心配することはありません！ 私も始めは大變怖がつたものです——今う

ちの息子は牛頭にゐます。旗を持つてゐるのが——私の息子です！

——ならずもの！ 何處へ行くの？ あそこには兵隊がゐるのに！

そして不意に骨ばつた手で母の手をつかまへて、脊高い、瘦せた女が叫んだ。

——ねえ、貴方、——何と言ふ歌ひ方でせう！ ミーチャも歌つてゐる……

——心配することはありません！——母は呟いた。——これは神聖な仕事です……まあ考へて御覽

なさい——キリスト様でも殺されなかつたら、あんなにならなかつたかも知れませんか！

この考へは不意に彼女の頭に燃え上り、その明かな、簡単な眞理を以て彼女を驚かせた。彼女は堅く彼女の手を握つてゐる女の顔を見つめて、驚いたやうに微笑みながら、繰り返した。

——キリスト様でも殺されなかつたら、あんなにならなかつたかも知れませんか。

彼女の隣りにシーゾフが來た。彼は帽子をとり、歌の調子に合わせてそれを振りながら、言つた。

——おおつびらに行くんですからな、かみさん、ええ？ 歌も考へたもんです。——何て歌でがせ

う、ええ？

——『帝の軍隊の爲に兵卒が入用だ、

彼に息子をやつちまへ……』

——何も怖がることはねえ！——シーゾフが言つた。——わつちの息子はお墓にゐまさあ……

母の心臓はあまりに強く鼓動したので、彼女は次第に後れ始めた。彼女は直ぐに脇へ突き除けられ

瞬に壓しつけられた。そして彼女の横を揺れながら、厚い人波が流れて行つた。——彼等は大勢だつた。彼女はそれが嬉しかつた。

——『立て、奮へ、労働大衆よ！……』

空中には巨大な眞鍮ラッパが歌つて、歌つては、人々を揺り起してゐるやうであつた。或者の胸には戦ひの覺悟を、他の者には漠然とした歡喜や、何か新しいものの豫感や、燃えるやうな好奇心を、呼び覺しながら。彼處では——ぼんやりとした、希望の戦慄を掻き立て、此處では——幾年もの間に積み重ねられた憎惡の烈しい流に吐け口を開く。總ての者は赤旗が揺れ、なびいてゐる前方を眺めるのであつた。

——やつた！——誰かの有頂天になつた聲が吼えた。——でかしたぞ！

そして普通の言葉では言ひ現はせない、何か偉大なことを感じてゐるらしく、その男は大きな聲で罵り喚いた。然し憎惡も、奴隷の暗い、盲目な憎惡も、その上に落ちる光によつて掻き立てられながら、毒舌の中にのたうち、さらさらと蛇のやうに音だてるのであつた。

——外道奴！——拳で嚇かしながら、窓の内側からちぎれた聲が叫んだ。

そしてうるさく母の耳に誰かの刺すやうな金切聲が残つた。

——帝に抗ふのか、あの帝に抗ふのか？ 暴動するのか？

母の横を當惑した顔があらはれて消えた。百姓や女連が跳ねながら走つて通つた。群集はこの歌聲にさそはれた薄黒い熔岩のやうに流れて行つた。歌聲は響の壓力を以て自分の前にある總てをくつがへし、道を掃き清めるやうに思はれた。遠くに赤旗を望むと、彼女は——見なくても——息子の顔、青銅の額、信念の明かな火に燃える眼が、ありありと見えるのであつた。

然し彼女は遂に群集の殿軍になつて、急ぎもしないで、平然と前を見ながら、その大詰を前から知つてゐる觀衆の冷い好奇心を以て歩いて行く人々の間になつた。彼等は歩きながら、小聲で、仔細らしく語つた。

——學校の横に一中隊ゐる。それからもう一中隊が工場の傍に……

——知事が來た……

——ほんとかい？

——俺は自分で見て來たんだ、——來た！

——誰かが愉快そうに罵つた。そして言つた。

——やはり俺達の兄弟が怖くなつたんだ！ 軍隊も、知事も。

——身内の人々！——母の胸中にのたくるものがあつた。

然し彼女の周圍の言葉は死んだやうに活氣なく、冷淡に響くのであつた。彼女はこんな連中から離

れようとて足を早めた。彼等のゆつくりした、退儀そうな歩みを追ひ越すことは彼女にとつてたやすいことであつた。

と不意に群集の頭が何かにぶつつかつたやうであつた。その胴體は停止しないで、不安な小さいとよめきを伴つて、後の方に揺れ返して來た。歌もまた一時身頼ひをした。それから前よりも急調に、聲高く續いて行つた。そして今一度音響の厚い波は低下減退した。聲は合唱の中から續々と脱けて行つた。歌を前の高さに引き上げ、前へ押し出そうと努める個々別々な叫びが起つた。

——『立て、奮へ、労働大衆よ！』

敵にむかへ、飢ゑたる者よ！……』

然しこの呼聲の中には一般に融けあつた自信がなかつた。そして既にその中には不安が戦いてゐた。何も見ないで、又前に起つたことを知らないで、母は群集を掻き分けて、素早く前に出ようとした然し人々は彼女を押し返して來た、或者は——頭を屈げ、眉をひそめて、他の者は困つたやうに微笑しながら、第三の者は嘲笑的に口笛を吹いて。彼女はなさけなきやうに彼等の顔を眺めた。彼女の眼は暗黙のうちに訊ね、頼み、呼ばふのであつた……

——『諸君！——パーヴェルの聲が響き渡つた。——軍隊とても我々と同じ人間だ。彼等は我等を打たなくなるであらう。何故に打つことがあるんだ！——我々が萬人に必要な眞理を持つてゐる爲か！』

この眞理は彼等にも必要なのではないか。彼等は今や強盜や殺人の旗の下にはなく、我々と共に我々の自由の旗の下に進む時が、既に眞近かに來てゐるのだ。彼等に我々の眞理をなるだけ早く悟らせる爲にも、我々は進まなければならん。進め、諸君！——常に——進め！

パーヴェルの聲は斷然として響き、言葉は空中にはつきりと鳴つた。然し群集は崩れて行つた。人々は續々と右往左往して家の方へ退き、塀際にくつついた。今や群集は襖の形をとりその尖端にパーヴェルがゐた。そして彼の頭上には労働大衆の旗が眞赤に燃えてゐた。又更に群集は黒い鳥に似てゐた——それは自分の翼を廣く張り、いつまでも飛びたうと身構へながら、氣を配つてゐた。パーヴェルはその嘴であつた……

二十八

通りの端に、——母は見た、——廣場への出口を閉ざして、顔のない一樣な人間の、灰色の壁が立つてゐた。彼等のうちの誰の肩にも銃劍の鋭い縞が冷く、細く光つてゐた。黙して動かないこの壁から、労働者の方へ、寒い冷氣が吹き寄せて來た。それは母の胸によりかかつて、彼女の心臓に突きついた。

彼女は凭れかゝりたいやうな氣持で、群集の中へ割りこんで行つた。そこには未知な人々に交つて先頭の旗の傍についてゐた彼女の知つてゐる人達がゐたのであつた。彼女は背の高い、髯を剃つた男の横にびつたりとくつついた。彼は片眼だつたので彼女を見る爲にひどく頭をふりむけた。

——どうしたんだ？ 何處のうちのものだ！……彼は尋ねた。

——パーヴェル・ヴラソフの母です！——膝頭の下が顫へ、下唇が知らず知らず垂れ下るのを感じながら、彼女は答へた。

——ふん！——片眼が言つた。

——諸君！——パーヴェルが言つた。——生涯前へだ——我々には他の道がない！

靜かに、鋭敏になつた。旗はさしあげられ、ぐらぐら揺れた。そして思案深げに人々の頭上で漣りながら、泳ぐやうに兵卒の灰色の壁の方へと動いて行つた。母は身顫ひして眼をとさした。そしてあつと聲を立てた——パーヴェル、アンドレイ、サモイロフ、それにマージンの四人だけが群集からはなれてしまつたのであつた。

然し空中にはゆるやかにフェーチャ・マージンの朗らかな聲が顫へ始めた。

——『君達は犠牲になつた……』——彼は歌つた。

——『運命的な……戦ひに於て……』——二つの重い溜息となつて、太い、低められた聲が響いた。

人々は小さき足で大地を打ちながら、前の方へと進んで行つた。すると新しい、斷然たる、既に身を決したやうな歌聲が流れた。

——『我等は能ふ限りの總てをその爲に投げ出した……』鮮やかなリボンとなつてフェーチャの聲が屈曲した……

——『自由の爲に……』——同志が親しげに歌ふのであつた。

——うへえー！——さま見ろと言はぬばかりに脇の方で叫んだものがあつた。——御詠歌をあげやがつた、べら棒め！……

——彼奴を殴れ！——憤つた叫びがおこつた。

母は胸を両手でつかんで、あたりを眺めた。そして以前はぎつちりと往來を一杯にしてゐた群集が躊躇して立ち止り、思案の小首を傾けながら、旗を持つた連中が遠去かつて行くのを眺めてゐるのを見た。彼等の後に續くものは數十名しかなかつた。それも一歩進む毎に、恰も往來の眞中が赤熱して足の裏を焼くやうに、誰かを脇の方に跳びのかせるのであつた。

——『専制は倒れん……』——歌はフェーチャの口を藉りて豫言した。

——『民衆は立たん！』——斷然と威嚇するやうに力強い聲の合唱が彼に和した。

然しその歌の整然たる流れの間を小さな聲が貫いた。

號令をかけてるぞ……

——構へ！——前方で鋭い叫びがおこつた。

空中に銃剣が屈曲して揺れ動き、倒れた。そして狡猾に微笑みながら、旗にむけて突き出された。

——進め！

——やりおつた！——片眼が言つた。そして両手をポケットに空込んで、大股に脇に避けた。

母は瞬きもしないで眺めてゐた。兵卒の灰色の波は動揺した。そして町幅一杯に伸びて、自分の前に銀色に輝く鋼鐵の齒の疎な櫛を携へながら、滑かに、冷酷に進んで来た。彼女は大股に歩んで息子により近く立つた。そしてアンドレイもパーヴェルの前に踏み出して、自分の長い身體で彼をかばはうとしたのを見た。

——並んで行けよ、おい！——鋭くパーヴェルが叫んだ。

アンドレイは歌を歌つた。両手を脊に組み、頭を高くあげてゐた。パーヴェルは彼を肩で突いて、再び叫んだ。

——並べよ！ 君には権利がない！ 先頭は——旗だ！

——解散！——小さい士官が白いサーベルを振りまはしながら、細い聲で叫んだ。彼は足を高くあげて、膝を曲げずに、性急に足の裏で大地を叩いた。母の眼には彼のピカピカ磨いた長靴がうつつた

横側を彼より少し後れて、脊の高い、髯を剃つた男が重々しく歩いてゐた。彼は太い白い口髯を持ち、赤い裏のついた長い灰色の外套を着て、黄色い筋のはいつた廣いズボンをはいてゐた。彼もまた小ロシア人のやうに脊中で手を組み、濃い白毛眉を高くあげて、パーヴェルを眺めてゐた。

母は數へ切れないほど多くのことを見たので、彼女の胸には吐息をつくことに飛び出したがる聲高い叫びが動かずに蟠つてゐた。それは彼女の息の根をとめそうであつた。然し彼女は両手で胸をつかまへながら、その叫びを押し耐へてゐた。群集は彼女を突きとばした。彼女はよろよろしながら、考へることもなく、殆ど意識すらなしに、前の方へ進んで行つた。彼女は自分の後に群集が益々少なくなつて行くのを感じてゐた。眞正面からせまつて来る冷酷な波が、彼等を散り散りにするのであつた。

赤旗の人々と灰色の人々の密な鎖とは益々近く動いて来た。兵士の顔もはつきりと見えた——町幅一杯の廣さで、汚れた黄色い狭い筋に奇體に扁平にされた顔——その中には所まんだらに雑多な色の眼が印され、その前には銃剣の細い切先が残酷に光つてゐた。人々の胸に擬された銃剣は、彼等に觸れないうちから、彼等を續々と群集から引き裂き、それを崩すのであつた。

母は自分の背後に逃げまどふ人々の足音を聞いた。息の詰つた、度を失つた聲が叫んだ。

——おい、逃げる……

——ヴラソフ、走れ！……

——退却だ、パーヴェル！

——旗を棄てろ、パーヴェル！——陰気にヴニツフシチコフが言った。——こつちへよこせ、俺が隠そう！

彼は片手で旗竿をつかまへた。旗は後に傾いた。

——よせ！——パーヴェルが叫んだ。

ニコライは恰も火傷でもしたやうに手を引いた。歌は消えた。人々はびつたりとパーヴェルを取り巻いて停止した。然し彼はそれを押し分けて前進した。不意に、一時に、沈黙が押し寄せた。それは恰も知らぬ間に上から降りて来て、人々を透明な雲で包んだやうであつた。

旗の下には多くて二十人ばかりの人が立つてゐた。然し彼等は、彼等の身を氣づかふ感情と、何か彼等に言ひたいぼんやりとした欲望とで母を引きつけながら、斷乎として立つてゐた……

——あの男から取りあげ給へ、中尉。あれを！——脊高い老人の滑かな聲が聞えた。

彼は片手を伸ばして旗を指さした。

小さい士官はパーヴェルの方へ走り寄つて、片手で旗竿をつかまへ、疇高く叫んだ。

——放せ！

——手をのける！——聲高にパーヴェルが言った。

旗は右や左に傾きながら、空中で赤く揺れた。そして再び眞直ぐに立つた——士官は飛びのいて、尻餅をついた。母の横を、拳を固めて眞直ぐに伸した手を突き出しながら、彼にない素早さでニコライが走り抜けた。

——奴等をひつつかまへろ！——地面を足で踏んで老人が怒鳴つた。

數名の兵卒が飛び出した。一人は台尻を振りまはした——旗は身顛ひし、傾いてそのまま灰色の兵卒の魂の中に消え去つた。

——えいつ！——誰かが情なさそうに叫んだ。

母も獸のやうな吼え聲で叫び出した。然し彼女に答へた兵卒の群の中からパーヴェルの明瞭な聲が聞えた。

——さよなら、母さん！ さよなら、……

——生きてゐる！ 思ひ出して呉れた！——母の心で二度打つものがあつた。

——さよなら、おばさん！

脊伸びして、両手を振りまはしながら、彼女は彼等を見ようと努めた。すると兵卒の頭越しにアンドレイの丸顔が見えた——それは微笑して、彼女にお辭儀をした。

——可愛い……アンドリニューシャ……パーシャ……彼女は叫んだ。

——さよなら、諸君！——兵卒の群の中から叫んだ。
 數度のちぎれちぎれな反響が彼等に答へた。反響は窓の中から、何處か上の方から、屋根から答へるのであつた。

二十九

彼女の胸を突くものがあつた。眼を覆ふ霧を通して彼女は自分の前に小柄な士官を見た。彼の顔は赤く、緊張してゐた。彼は彼女に叫んだ。

——あつちへ行け、女！

彼女は彼を上から下へと見た。彼の足元には二つに折れた旗竿が見えた——その一つには赤い布片がくつついてゐた。彼女は腰を屈めてそれを拾つた。士官は彼女の手から棒切を奪ひとつて、脇へ投げ棄てた。そして足を踏み鳴らしながら叫んだ。

——あつちへ行けと言ふのだ！——

兵卒の間から歌が燃上つて、流れた。

——『立て、奮へ、勞働大衆よ……』

總てが渦巻き、揺れ動き、戦慄した。空中には電線の唸りにも似た、幅廣い、混亂した騒ぎが起つた。士官は腹立たしく叫びながら、駆け去つた。

——歌を止めさせろ！ クライノフ曹長……

母はよろめきながら、彼が棄てた竿の破片に近寄つた。そして再びそれを拾つた。

——喉をつめろ……

歌は亂れ、顫へ、ちりちりになつて、消え去つた。誰かが母の肩をつかまへて、彼女の體をまはし背を突いた……

——行け、行け……

——正來を掃除せよ！——士官が叫んだ。

母は自分から十歩ばかり離れた所に再びぎつしりつまつた群集を見た。彼等は吼え、呟き、口笛を吹いた。そしてゆるやかに往來を後退りながら、屋敷内へと散らかつて行つた。

——行け、あま奴！——若い髯面の兵卒が母の横にきて、彼女の耳に怒鳴りつけた。

彼女は旗竿に凭りかかつて歩いて行つた。彼女の足はよろよろした。倒れないやうにと彼女は片手で壁や塀につかまつた。彼女の前には群集が後退つてゐた。彼女の横や、彼女の背後には兵卒が怒鳴りながら歩いてゐた。

——行け、行け……

兵卒は彼女を追ひ抜いて行つた。彼女は立ち止つて、見まはした。往來の端には、廣場への出口をさへぎりながら、やはり兵卒がまばらな鎖となつて立つてゐた。廣場は空虚であつた。前方にも同じく除々に群集に迫りながら、灰色の人影が揺れ動いてゐた。

彼女は引き返そうと思つた。然し知らず知らずのうちに再び前へと歩いてゐた。そして横丁まで來ると、狭い、がらんとした露路にはいつた。

再び立ち止つた。重い溜息をついて、聞耳を立てた。何處か前方に人のどよめきがした。

不意に汗ばんだ彼女は、眉を動かし、唇を顫はせ、手を振りながら、旗竿にすがつて猶も歩き始めた。彼女の心には何かの言葉が火花となつて燃えあがつた。燃えあがつては、それを言ひたい、叫びたいと言ふ執拗な力強い欲望に火を點けながら、胸の中にこみあげて來た……

露路は鋭く左に曲つてゐた。そして曲り角の向側に母はぎつちりと集つた大きな人だかりを見つけた。誰かの聲が力強く、聲高に語つてゐた。

——兄弟、血氣にはやつて銃剣にかゝるな！

——彼等はどうだ、えゝ！ そいつに面と向つて行つて——突立つんだもの！ 突立つんだよ、兄弟！、恐れもせず……

——パーシャ・ヴラソフがそうだ！……

——小ロシア人は！

——手を背中に組んで、笑つてゐるんだ、糞……

——可愛い人々！——母は群集の中に割りこみながら叫んだ。彼女の前には丁寧に道があげられた誰かが笑ひ出した。

——見ろ——旗をもつてる！ 手に——旗を！

——黙れ！——他の聲が突慥貧に言つた。

母は廣く兩手を開いた……

——聞いて下さい、——御生だから！ 貴方がたは皆——身内の人達です……貴方がたは皆——近かしい人達です……何事がおこつたのか！——恐れずに御覽なさい。私共の血である子供達が手に手を取つて行くのです、眞理の爲に行くのです……皆の爲に！ 貴方がた皆の爲に、貴方がたの赤坊の爲に、自ら十字架の道を選びました……明るい日を探すのです。眞理にかなつた、正義にかなつた他の生活を望むのです……皆の爲によかれと欲するのです！

彼女の心臓は張り裂けるばかりであつた。胸は押しつけられ、喉はからからに焼けた。彼女の内心の底深くに、總てを、萬人を、抱擁する愛の偉大な言葉が生れて、彼女の舌を焼き、益々力強く、益

★自由に、それを動かせるのであつた。

彼女は見た——皆黙つて彼女の言葉を聞いてゐるのを、彼女は感じた——人々がぎつしりと彼女を取り巻きながら考へてゐるのを。そして彼女のうちには欲望が——今や既に彼女に明白な——人々をそこへ、息子の方へ、アンドレイの方へ、兵卒の手に渡り、ひとり残された人の方へ、突きやらうといふ欲望がわきあがつて來た。

彼女は眉をしかめた注意深いまはりの顔を見まはしながら、優しい力を以て言ひ續けた。

——私共の子供たちは手に手を取つて喜びの方へ行くのです、——あれ達は皆の爲に、キリストの眞理の爲に、行きました。——我々の惡辣な、偽つきの、貧欲な主人が、それを以て我々を捕へ、縛り、押しつける總てに反抗して！ 親しい方々——それでは我々の若い血肉は全民衆の爲に立つたのではありませんか、全世界の爲の、全労働者の爲に、あれ達は行つたのですぞ！……あれ達から離れてはいけない、あれ達を棄ててはいけない、自分の子供達を孤獨な道に残してはいけません。——自分を憐みなさい……息子たちの心を信じなさい——あれ達は眞理を生んだ、その爲に亡びるのです。あれ達を信じなさい！

彼女の聲はかれきつた。彼女は力を失つてよろよろした。誰かが彼女の腕を支へた……

——えらいことを言ふ！——誰かが興奮して、意味もなしに叫んだ。——おい、皆、聞けよ！

他の者が同情した。

——あゝ、弱りはてゝゐる！

彼をとがめる者もゐた。

——弱りはてゝゐるんぢやない、我々を鞭うつて呉れてるんだ、馬鹿。——しつかりしろ！

高い、顫へ聲が群集の上に舞ひ上つた。

——まあ！ 私のミーチャ——心のきれいなミーチャ、——あれは何をしたの！ あれは仲間につ

いて行つた、愛する仲間……あの女の言ふことはもつともだ——何だつて私共は子供を捨てるんだ

！ あの子等が我々にどんな悪いことをしたと言ふの！

母はこの言葉を聞いて顫へ出した。そして靜かな涙を以てそれに答へた。

——歸りな、ニコウナさん！ 歸りな！ 御苦勞だつた！——聲高くシゾフは言つた。

彼は蒼ざめてゐた。彼の顎髭は亂れて、揺れ動いた。不意に眉をひそめ、いかつい眼で皆を眺めた

そして全身を眞直ぐに伸して、聞えるほどの聲で言つた。

——わしの伴のマトヴェイは工場で壓しつぶされた、——御存知かな。然し若し彼奴が生きてゐた

ら——わしは自分で彼奴をあの人達の間に送つてやるんだつた——マトヴェイ お前も行け！ と言

つてやるんだつたのに。行け、是は——間違ひない、是は——誓つてもよい。

彼は言葉を切つて、押し黙つた。皆は何か巨大な、新しい、然しもはや彼等を脅かさなない何かにか力強く抱かれて、陰鬱に黙つてゐた。シーゾフは手をあげて、それを振つた。そして言ひ續けた。

——年寄が話すことだ、——お前さん方はわしを知つてゐる！ 三十九年間此土地で働いて、五十二年間地上に生きて来たんだ。わしの甥、剛巧で潔白な子供だが、其奴も今日またつかまへられた。やはりヴラソフと並んで眞先きに行つたのだつた、——旗の眞ぎわに。

彼は手を振つて、體をぢぢめた。そして母の手をとつて言つた。

——この女はほんとのことを言つた。我々の子供は潔白で道理にかなつた暮しをしたと思つてゐる。それに我々はあれ等を見放して、——逃げた、そうだ！ 歸りな、ニロウナさん……

——お前さん方は私の身内です！——泣き腫らした眼で皆を見ながら言つた。——子供等にとつては——生活だ、あれ等にとつては——大地だ！……

——歸りな、ニロウナさん！ さあ、杖をもつて、——シーゾフは彼女に旗竿の折端を渡しながら言つた。

皆は悲哀と尊敬を以て母を眺めた。同情のどよめきが彼女を元送つた。シーゾフは黙つて行手の人々を押しやつた。彼等は黙つて脇へのいた。そして彼等をして母を慕はせるぼんやりとした力に引ずられて、急がないで、小聲で短い言葉をかはしながら、彼女の後について行つた。

自分の家の門口で彼女は彼等の方に振りむいて、旗の折端にもたれながら、お辭儀をした。そして感謝の意をこめて小聲で言つた。

——皆さん有り難う……

そして再び自分の考を思ひ出して、——彼女には自分の心が生んだと思はれる新しい考を、——彼女は述べた。

——わが主イエス・キリストでも、人々から榮ある死をうけなかつたら、あんなにならなかつたでせうに……

群集は黙つて彼女を眺めた。

彼女は今一度人々にお辭儀をして、自分の家にはいつた。シーゾフは頭を垂れて、彼女と共にはいつた。

人々は門口に立つて、何かのことを語つてゐた。

それから急がないで、散つて行つた。

295

昭和二十二年一月十日印刷
昭和二十二年一月十五日發行

母(第一部)
定價 三十五圓



A 104001

譯者	村田春海
著作權者	松本清太郎
發行者	東京都神田區神保町一ノ三九 永田周作
印刷者	東京都世田谷區祖師谷二ノ一二二六 田中末吉

發行所

東京都神田區神保町一ノ三九
電話 東京二二六八三八
電報 東京二二六八三八

第一出版株式會社

配給元 日本出版配給株式會社

(本製木青・刷印和大)

終